
ウィザードライセス

七篠雅大

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィザードライセンス

【Nコード】

N6931Y

【作者名】

七篠雅大

【あらすじ】

魔法使いつて言っても、そんなに便利なもんじゃないですよ——。そう諭してみたものの、あの鬼社長は俺を雇用しやがった。トラブル解決屋「NaN」の社員たちと社長が繰り広げる、魔法2割・雑談8割のアクションコメディ。だった気がする。最近では会話ばかりで若干冗長的。作者も疲れてきつつある。燃費最悪な魔法を使う、否、それしか使えない主人公が頑張っ立ち回ります。

再開しました

設定資料

設定資料（第十五話更新時点・多少のネタバレを含むので閲覧注意）

あらすじ

魔法使いって言っても、そんな便利なもんじゃないですよ——そう諭してはみたものの、あの鬼社長は俺を雇用しやがった。トラブル解決屋「NaN」の社員Aと社長が繰り広げる、魔法2割・雑談8割のアクションコメディ。

登場人物

主人公

○吉川芳樹

ヨシカワヨシキ

男、二〇歳。

トラブル解決屋「NaN」で働く、新米に少し毛が生えたくらいの社員。魔法が使えるが、理由は不明。そもそも自分で魔法と銘打っているだけで超能力と言った方が適しているような能力。何でもできるが、莫大な体力を消費してしまうので、普段は指先から小さい火を出して煙草の火をつけることぐらいにしか使っていない。最近の悩みは、ご近所さんからの嫌がらせ。

トラブル解決屋「NaN」の面々

○葉瀬川黒

ハセガワクロ

女、年齢不詳。たぶん三十路は超えていると芳樹は踏んでいる。トラブル解決屋「NaN」の社長。否、鬼社長。剛胆な性格で、慇懃無礼。とりあえず殴る。暴力的だが、実は以外と優しい。とか

言つとまた殴る。「NaN」の個性豊かな面々をまとめあげるだけのカリスマ性を持っている。

ムコウマキ

○向日槿

男、二五歳。

トラブル解決屋「NaN」の社員で、芳樹の先輩。力仕事はだいたい槿に回ってくる。性格はさっぱりとしていて、なおかつ熱いという、「男らしさ」の体現者。作中では描かれませんが、職場でも私服姿のことが多いので、霊歌にしかられることが多い。

タキサワサキ

○瀧澤咲

女、二二歳。

トラブル解決屋「NaN」の社員で、槿とは幼なじみであり、よく一緒にいる。だが恋愛感情については否定している。いつもほんわかとした雰囲気を全身から放出している。のんびりしている割には、仕事はきっちりてきぱきとこなす。

サイザキレイカ

○幸崎霊歌

女、二六歳。

トラブル解決屋「NaN」の社員で、受付・事務担当。後輩である槿、咲、芳樹に対して厳しいところがあり、その性質を黒からは「指導癖」と評価されている。だが本当は優しい人物で気遣いもできる。黒のことを心の底から尊敬している。理由は不明。

登場組織

○トラブル解決屋「NaN」（トラブルカイケツヤ「ナン」）

黒が経営している会社。いわゆる何でも屋。汚れ仕事から雑用まで幅広く依頼を受付中。名前の由来は、何でも屋の「何」から。

ナカドウグミ
○ 中堂組

「NaN」のある穴島市に隣接する笹玉市界隈を根城にする暴力団組織。規模はそれほど大きくないが、現在勢力範囲を穴島市内にまで広げつつある。

トキサカグミ
○ 時坂組

穴島市をシマにしている暴力団。

コクサイマホウキカン
○ 国際魔法機関

未だ名前しか登場していない、謎の機関。

舞台

シンジマシ
○ 穴島市

都会の中で忘れ去られたかのようにぼつんとある下町。人口は多くもなく少なくもなく。景気は良くもなく悪くもなく。結局は「ふつつ」が一番住みやすい、ということを教えてくれるすてきな町。

第一話 俺からの依頼

「意外だな。お前がまだガスや水道を使っていたなんて。公共料金もバカにならないだろう?」

時刻は午後十時。葉瀬川黒、性別女、年齢不詳、職業トラブル解決屋「NaN」社長を部屋に案内すると、いきなりそんなことを言われた。

「いやいや、当然だと思いますよこれぐらい」

「そうか? でも君なら指から火を出せばいいし掌の器に水を出せばそれで済むと思うんだが」

「いちいちそんなことやってたら、今度はエンゲル係数が大変なことになるですよ……」

いくら魔法を使えるからと言っても、何もないところから何かを生み出すことはできない。対価として自分の体内のエネルギーがかなり持つていかれるのだ。当然、腹が減るし、それ以前に乱発していたら体がいくつあっても足りない。

「それもそうだな。この間一回やってた雷落とすヤツとかは、もうなんか死ぬ一步手前って感じだったし」

「それを見て腹抱えて笑ってたのはどこの誰でしょうかね」

「あ、それアタシだわ」

悪びれる風もなく言うのでたちが悪い。

「『新魔法開発した』とか言うから見てやろうとしたら、張り切りすぎてでっけえ雷落として体力九〇パー以上使い果たすとか……笑い話にしかならんだろう。あ、思い出したらまた笑えてきた」

くつくつくと笑いを漏らす黒。前から思っていたが、性格悪いなこの上司。

「はあ……。なんでもいいですけど、そろそろ本題に入りましょうよ」

「ああ、そうだったな。確か、君から依頼があると言っていたな。」

分かっていると思うが、社員でも金は払ってもらうぞ」

「まあ、そういうと思ってましたけど。六万は痛いですよ……」

渋々財布から諭吉を六人取り出して、黒に手渡した。

「毎度あり。あ、前から思ってたんだが、毎度ありって初めての客にも使っているものなのか？ 毎度じゃないのに」

「さあ？ 次からもよろしくって意味で使えば問題ないんじゃないですか？」

「おお、なるほど」

本気で感心したように黒が言った。性格悪い上に、どこかズレている。まあ、ズレていなければ「トラブル解決屋」などという胡散臭い商売はしないだろうが。

「で、依頼内容は？」

「えーとですね……」

話は、一週間前にさかのぼる。

俺、吉川芳紀、性別男、二〇歳、職業トラブル解決屋「NaN」社員、魔法使いがこの部屋に越してきた時の話である。

一通り荷物や家具などを新居——二階建てアパートの一室に運び込んだ俺は、いろいろと困ったことになった。

とりあえず一段落したので、覚え立ての煙草でもふかそうかとベランダに出た。ライターどこやったっけとポケットをまさぐるが、出てこないの、仕方なく指に火を灯した。一瞬だけで良いし、火の大きさもそれほどではない。体に支障をきたすほどの魔法でなければ、まあたまにこうして使うことはある。

しかし問題はそこにあるのではない。

隣人に、その場面を目撃されてしまった。

「どうやって火を出していたのか」などとしつこく問いつめられてしまい、もうヤケクソだどうにでもなれといった調子で自分が指から火を出すどころかいろいろなことができる（要するに魔法が使える）ことを教えてしまった。初めは何かのトリックではないかと

疑っていたようだったが、本当に種も仕掛けもないということが分
かると、隣人は「一人にさせてくれ」といつて部屋の中に引きこも
ってしまった。

おそらく、今までに見たことのない怪奇現象を目にして混乱して
しまったのだろう。

それだけなら、まだ良かったのだが……。

「翌日からですよ。早くこのアパートから出ていけって感じで、嫌
がらせみたいなのが始まって。ポストに新聞の見出しの文字を切り
抜いて作った『出ていけ』みたいな手紙が入ったり、部屋の前に
ゴミが捨ててあったり……」

「ちよつと待ちな。どうしてお前が出ていかなければならない？」

「こつちが聞きたいですよ……まあ、隣の部屋の人間がバケモノだ
ったらそりゃあ嫌でしょうに」

自虐的な笑みを浮かべてみた。別に本気で言ったわけではないの
だが、

「ばかもの」

と、黒に頭を殴られた。

「痛っ、何するんですか社長」

「自分のことをそんな風に言うな。お前はバケモノなんかじゃない、
むしろばかものだ。……お前は、ちゃんとした一人の人間だろう」

ふん、と鼻息荒く黒が言った。

「社長」

「何だ」

「優しいんすね」

また殴られた。

「じゃあ、とりあえずお前がここでちゃんとのんびり暮らせるよう
に嫌がらせを止めればいいんだな？」

「まあ、そういうことになりますね」

「ホント、魔法が使えるつつうのも困りものだな」

「この時代には合わないんですよ。あーあ、時空間魔法でも使って昔に飛べりゃあな……」

「ンなことしたら、お前死ぬぞ？」

「分かってますよ」

時間をねじ曲げるといふのは、おそらく魔法の中でもかなり次元の高いものだろう。そんなものを使えば、俺の体の中のエネルギーはまるまる持っていかれ、走馬燈を見る暇もなく一瞬で果ててしまうであろうことは、想像に難くない。

「うむ……どうやったら嫌がらせが止まるか、検討してみよう」

「はい」

話し合いが始まった。このような仕事上の話をする場合、黒は真剣な表情になる。

「じゃあ、こんなのはどうか？」

「何でしょう？」

「大規模魔法を見せてつけて『嫌がらせすんなやオラ』と脅す」

「たぶん逆効果、でしょうね」

相手はこちらがそのような行動に出ることを危惧して、早く出ていけと言っているのだ。火に油を注ぐようなことにしかないだろう。

「それに、そんな魔法を使ったら俺が疲れますし、何よりほかの住人にまで俺がバケモ……魔法使いだってばれますよ。そんなことになつたら、事態が悪化するばかりです」

「それもそうか」

難しいものだな、と黒が唸った。

「……普通に暮らし続ける、っていうのも悪くない手かとは思いますが。俺に危険性が無いってことを認めてもらえばいいわけです」

「いや、そのイメージを覆すのにどれだけの時間がかかるかを考えると、どうにもそれじゃキツそうだな。毎日毎日家の前に残飯ベツトリじゃあお前の気がおかしくなるだろう」

「そうですね……。はあ、いい解決方法はなしか」
結局、話し合いは行き詰まった。

その後、まあとりあえず殴り込むかという結論に至り、芳紀と黒は隣の部屋を訪ねた。

ぴんぽーん

「すみませーん、誰かいますかー」

「そろそろ諦めましょうよ、社長。さすがに十分も家の前に居座られたら、向こうも困りますって。時間も遅いですし」

「困っているのはお前の方だろ？」

「いや、そうですけど……」

何度呼びかけても、隣人は結局出てこなかった。

未練がましく再度呼びかけを続ける黒を引っ張って、自分の部屋に戻ろうとしたその時。

「あら、そこに住んでいた人、一昨日引っ越しましたよ」

さらにもう一つ隣の部屋の住人が、親切にも教えてくれた。

「でも昨日も嫌がらせあったんすけどね。窓に残飯が張り付いてました」

「もうそれ警察に届けるか大家に言うかしたほうがいいだろう……」
黒が呆れたように言った。

「でも、隣の人は一昨日には引っ越してっただから、あの人の作業じゃあないってことですよね」

「まあ、そうなるな。というか、そもそもどうして隣の人間の犯行だと思ったんだ？」

「だって、あんなことがあった翌日ですし、わざわざ余所の人間が毎日律儀にイタズラしに来ると思えませんでしたし……」

「そいつはお前の魔法を怖がっていたんだらう？ だったら刺激するような真似をするはずがない」

「ああ、確かに」

言われてみれば、隣の人間が嫌がらせの犯人だと断ずるには証拠が不揃いである。どころか、黒の言うように自ら仕返しを受けそうな真似をするというのは考えにくい。早とちりをしてしまったのかもしれない、と少し反省した。

「だが、隣人が犯人じゃないとなると、じゃあ誰がそんなことをしたんだ？」

黒が当然の疑問を口にした。

「さあ、職業柄どこで恨みを買ってもおかしくありませんからねえ」

「それを社長の前で言うとはいいい度胸だな」

「でも間違っていないでしょう？」

「……そうだな」

渋々と言った顔で黒が首肯した。

「とにかく色々探るためにも、まずは腹ごしらえだな。飯にしろ」

思考を放棄したかのように、黒はごろりと寝ころんだ。いや、ここ俺ん家なんすけど。

「そうですね……えーと、何かあったっけ」

「鍋がいいな」

「いいですね、鍋」

いいですけど、鍋なんてできる経済力はないです。給料低いし、ついさつき諭吉六人さらわれたし。できたとしても湯豆腐までだ。

冷蔵庫を見ると、卵が二つ。あと、マヨネーズとドレッシングがある。いや、それだけしかない。続いて戸棚を覗いても、カップラーメンやらインスタントラーメンやらの文明の利器もとい利食は見当たらなかった。

「社長、残念ながら湯豆腐はできそうにありません」

「湯豆腐ってできても残念感があるけどな。あと私は湯豆腐を鍋だと認めん」

「なっ……！ 湯豆腐おいしいじゃないですか、湯豆腐に謝れ！」

「そんなに好きか湯豆腐……。まあいい、だったら出前取れ」

時計を見ると、すでに十二時を回っている。さすがに無理だ。

「おっ」

炊飯器を見ると、かるうじてご飯が残っていた。これで何とかできないだろうか。

「社長」

「なんだ？」

「卵かけご飯って、湯豆腐の次の次くらいに美味しいですよね」

本日の夕飯。

ご飯一膳、卵一個（一人分）。

ちなみに醤油はありませんでした。

第二話 起床、そして出勤

「……ん？」

どうやら、昨晚卵かけご飯を食べた後、すぐに寝てしまったようである。時間は一時を回っていたし、仕事終わりに依頼を聞いて貰っているという動き回ったので、俺も黒も疲れていたのだろう。

「あ、そうだ」

今になってやっと気づいたが、黒はどこに……。

ごそつ。

「うゝん……」

布団も敷かずに寝てしまったので、床の上ではあるが。

隣に黒がいた。否、寝ていた。

「おいおい……」

顔から、体中から血の気が引いていくを感じる。もしかこれは「一夜をと共に過ごした」ということになってしまふのだろうか。

いやいや、やましいことなどないのだから問題なからう。しかし、見た目年齢で「自主規制」歳になる黒と寝たというのは、何とも気が重くなる。確かに黒はそれなりに美人ではあるが、見た目「自主規制」歳の女性、悪く言えばオバハンと寝る趣味はない。俺は……。

「俺は熟女趣味なんかじゃないんだああああ」

「うるするええ！」

翻訳すると、うるせえ、である。おそらく。寝起きでしたが回らなかったのだろうか。

黒のチョップが俺に襲いかかった。

「っ痛う……！」

「おい、朝っぱらからなに叫んでるんだ」

「社長も今し方『うるするえ』という奇声を上げたところでは……」

「お前のせいだ」

指摘されて思わず二の句をつけなくなる。

「って酒臭っ!？」

「当然だろ。飲んだんだから」

どうやら俺が寝落ちしてしまった後も、すっかり一人で酒を楽しんだらしい。

「ていうか多分俺の酒ですよ、それ」

「だから当然のことばかり聞くな。というか酒があるなら早く言え。卵かけご飯と一緒に飲んだ方が絶対うまかった」

俺の渾身の一品をおつまみ代わりにしないでください。

渾身といっても、それしかなかったただだが。

「まあ酒代は後で給料から引いとくから安心しろ」

「足してください」

なぜ自分の酒を飲まれた挙げ句給料までさっ引かれるのだ。

「はあ……。もういいです、酒の話は。依頼を解決してくれるんでしたらチャラにします」

「そうか」

まだ本調子ではないらしい黒が適当にうなずいた。頭を痛そうにしているの、二日酔いだろうか。黒はぐるぐると首を回して、欠伸をした。

「とりあえずお前の件は夜に処理していくとして、今日も出勤しないとな」

「やっぱりそうですよ」

俺も黒も、一応は社会人である。時間はきちんと守らねばならない。トラブル解決屋「NaN」の事務所が開くのは午前十時だ。普段からそれほど客が多いわけではないので、この時間でも特に問題が生じない。

客が少ない故に始業時間は遅いが、なにぶんグレーな商売なので、それ相応のグレーな客もしばしば訪れる。そのため終業は午後十二時である。昨日早く仕事を終えた（といっても、社長は俺の依頼を

聞くという業務をしていたが）のはあくまで特例で、普段はかなり遅くまで仕事をしているのだ。

仕事といっても、本当に客が少ないので事務所の机についているだけののだが。

「時計時計つと……」

「壁掛け時計とか置き時計とかないのか？」

「ああ、はい。一人暮らしする分には腕時計があれば十分ですし。目覚ましはケータイを使っていますね」

もっとも、一人暮らしではそもそも時間自体さほど気にする必要もないので、家の中では腕時計も外しているが。

「ごそそと部屋の中を這いずり回って、やっとのことで腕時計を発掘し、時計をのぞき込む。」

すでに、十時半を回っていた。

「社長」

「なんだ？」

「走りましょう」

俺の家から事務所までは、徒歩で五分、全力ダッシュなら二分の距離にある。そのため自転車や自動車などの通勤手段は用いない。それでも俺も社会人の端くれ、中古車ではあるが車も持っているし免許もある。

しかし、本来ならば、走った方が車で行くよりも近い距離だ。だから走ろうと黒に提案したのだが――

「頭痛い。無理、走れない。車で送ってくれ」

――という鶴の一声で、結局車で事務所に向かうことになった、のだが。

「この距離で渋滞かよ……」

「全くだ。何をしているんだ。ぐずぐずしている暇がないことぐらいわかってるだろう」

「アンタよりはわかってるよー!」

そう言ってみても、黒はいつものように、悪びれる風もなければ全く動じてもない。いや、「悪びれる」とか「申し訳なく思う」とかいう単語は、この人の辞書には載っていないのかもしれない。なら仕方がない、と諦められる問題でもないが。

「何をしているんでしょうね、ホント……」

そして、誰のせいでこんなことをしているんでしょうね。

カーステレオに付いた液晶には、「10:52」という時刻が表示されている。これほど大幅の遅刻は、基本真面目な俺にとっては初めてのことだ。

「はあ、こりゃ幸崎さんに怒られるだろうなあ……」

「あいつは厳しいからな」

「せめて社長もあれくらい厳しくなってくれたらいいんですけどね」

「安心しろ、アタシは遅刻くらいじゃ怒らない広い懷を持っている」

「ありがとございます。でもせめて自分にだけは厳しくなってください」

「嫌だね」

にやにやと笑って黒が言う。弄ばれているようで良い気がしなかった。

結局、事務所に到着できたのは午前十一時を回った頃だった。

第三話 危ない仕事

「ふう……おはようございます……」

「遅いよ芳樹君。遅刻一時間以上なんて、新人のする事じゃ……つて黒さん!？」

「よっ、幸崎」

事務所に到着した俺と黒を出迎えたのは、幸崎靈華、性別女、二六歳、トラブル解決屋「NaN」の社員だった。非常に厳しいが（黒曰く「指導癖」）、柔和な笑みを作ることのできる彼女は、基本的に受付の仕事に回っている。

今日もその指導癖で俺に注意をしようとしたようだが、黒を見てよほど驚いたのか、しばらく口をあわあわとさせていた。

「どうした幸崎？　なんか変なことでもあったのか？」

「……黒さん、昨日確か早退して吉川君のところに……」

「ああ、行ったな」

「ですよ……。おまけに黒さん、なんかお酒のにおいするし……」。

それで、一緒に出勤つて、まさか昨日……」

わなわなと震える靈華。なんだか、嫌な予感がした。

「ああ。寝たぞ、一緒に」

「何でそういう言い方しかできないんですか社長!」

「やっぱり、そうなのね!　そうだったのね!」

そうだったのねー、と叫びながら謎のハイテンションで乱舞する靈華を後目に、黒は「ん?」という顔をしている。本当に意味が分かっているのかもしれない。

そんなんだから結婚できないん……」。

「痛い!」

黒から前振りなしにチョップが襲いかかった。

「なんで殴るんですか!？」

「いや、なんか失礼なこと考えてたっばいから」

「まさか……俺の本音を見破っただと!？」

「そこで本音っていったらいろいろアウトだけだな」

黒が苦笑いした。あっち系のことは鈍くても、こういう自分に対するイメージなどのことには鋭いらしい。野生の本能のようなものなのだろうか。

その後、未だに乱舞を続けている霊華をなだめるのにしばらく時間がかった。

「そう、依頼の話をしてたのね。……でも、それが遅刻して良い理由にはならないわよ？」

「すいません……」

「まあ今回のことは大目に見てあげるわ。なんか大変そうだし」

大変そう、というのは、俺が黒に出した依頼の内容のことだろう。

「ただ、いくら時間がないと言っても、着替えくらいはしてきてほしかったかな……そのシャツも何も、昨日のままじゃない。お風呂も入ってないんでしょ、どうせ」

「うっ……」

たしかに、本当に必死で急いできたので今まで気づかなかった——というか気が回らなかったが、俺も黒も服装は昨日のままだ。まあ、黒に関しては着替える服自体がないので当然だが。

風呂に入っていないので、体臭もかなりきついのもかもしれない。それでも、黒の酒臭さと比べればましである。……と、信じたい。

「とりあえず、奥のシャワールーム使って良いから、さっさと行ってきたさい。どうせ客はほとんど来ないんだし」

「ここシャワールームとかあるんですか!？」

「知らなかったの? 一仕事した後に入るお風呂は気持ちいいよー?」

お風呂と言ってもシャワーだけなんだけどね、と霊華が付け加える。まさかこの謎事務所にそんな施設があったとは。

「替えのシャツもあるから用意しとくね。ほら、黒さんも早くシャ

ワー浴びてきて」

「んー……頭痛い……」

「まったくもう……」

霊華が俺に説教をしている最中、黒は、二日酔いの頭痛がまた襲ってきたのだろうか、ノックダウンしていた。事務所入り口にある来客用のソファでぐったりと寝ている。

そんな時である。事務所の入り口から、二人組が入ってきた。

「おーっす……」

やってきたのは待ち望んだ依頼人ではなく、向日榎、性別男、二五歳、トラブル解決屋「NaN」社員と。

「疲れた……」

瀧澤咲、性別女、二二歳、同じく「NaN」社員だった。

「あら、榎君、咲ちゃん。お帰り」

霊華が榎と咲を出迎える。当然のことながら、俺と黒が出勤したときよりも対応が柔らかである。どうやら榎と咲は今まで仕事をしていたようだ。

「ふええ……今回こそ死ぬかと思った……」

「そんなに大変だったの？ 暴力団のお手伝い」

「なっ！？」

思わず声を漏らしてしまった。

確かにここはトラブル解決屋。胡散臭い依頼や多少危険を伴う依頼も舞い込んでくることはある。だがそれでも一般人の常識から逸脱しないレベルだった。少なくとも、ここに入ってから俺が請け負った依頼は。

しかし。

「ああ、わりと大変だったぜ。なんせ機関銃持ち出してきやがって相手の組。拳銃くらいならまだ楽だけどよ、盾にした車が吹っ飛んだ時はさすがにビビったぜ」

「ビビっただけで済む榎君はいいよね……。はあ、私なんか本当に生きた心地がしなかったよ」

「あら。まあ、お疲れさま」

事務所の面々は誰も皆、平然としていた。
ちなみにそのとき俺は啞然としていた。

「あ、シャワーさっさと使ってきなさいな、芳樹君」

「あ、はい……」

あまりの「世界」の違いに面食らった俺は、半分無意識でふらふらとシャワールームに向かった。

シャワーを浴びながら、いろいろなことを考えた。

自分は本当にこのままこの事務所で働いていいのか。ここで働くことによって死ぬことはないのか。また、誰かを死なせるようなことはないのか。

先ほど槇と咲がしていた話からすると、どうやら二人は暴力団の手伝いのようなものをしていたらしい。銃撃戦があったようなことを言っていた。にわかには信じがたいことだが、もし事実なのだとしたら、相当に危険なことに足をつっこんでいることになる。

これは、誰がどう見ても、ヤバイ。

「ん……ああ、お前か」

シャワールームから出ると、黒がソファアに座っていた。彼女も女性用のシャワーを使っていたようである。濡れた髪をタオルで拭いているところだった。

「社長、聞きたいことがあるんですけど」

「どうした？ ビビったか？」

見抜かれていた。

「……はい、正直」

「プッ」

「笑わないでくださいよ！ ああ、もう。……あんな仕事、よくあるんですか？」

「あそこまでのさはすがによくあるとは言えない。まあ、多くて月イチだ」

「十分多いですよ……」

「安心しろ、今のところお前にそういう仕事を回す気はない。だってお前は」

新人だからな。

黒は、そう言った。

「まあ、もうそろそろお前がここにきて二ヶ月……ってとこか。新入社員も、この頃になると、この仕事がどれだけヤバイもんかってことに気づく。それで大抵の奴は三ヶ月でやめていく」

「……」

「まあ、あいつらは三ヶ月過ぎてもずっとここにいる奴らだからな。根性ある」

「社長」

俺は覚悟を決めて、こう切り出した。

「教えてください。ここが、どんな会社なのか」

最初はな、アタシ、一人で始めたんだ。

トラブル解決屋なんて胡散臭いこと始めようと思ったのは、金が欲しかったから。

そもその前提として、アタシにはそういう「裏」とのつながりみたいなもんがあった。実家がヤクザでな……テキ屋系の。ああ、テキ屋の意味が分からないんだったら、辞書で調べてくれ。

話がそれたが、まあそんな感じでアタシは汚いことやってる金持ちの知り合いとかいっぱいいたんだ。そいつらは大抵その「汚いこと」でいろいろ困ってる。そこに目を付けた私は、そいつらから何とかして金を搾り取ってやろうとして、こんな会社を作ったのさ。

少しずつ得意さんの依頼主とかもできはじめて、経営は軌道に乗った。当然危ない仕事や犯罪まがいのことも沢山やった。そうしなければ、生きていけないからな。

お前も知っていると思うが……というかその側面しか知らなかっただろうが、当然悪人ばかりから依頼を受けているわけじゃない。

最初の頃はそういう「普通じゃない」依頼の方が多かったが、今となってはなんてことはない、善良な一般市民からの依頼が九割だ。そしてそのほとんどは、どれだけ高くても一回三万円とか、常識の範囲内の額で受けている。

……ああ、昨日のお前からの依頼は六万ぶんどったが、ありや特別だ。アタシはあそこまで外道じゃない、一般人にはな。

ただ、当然一つにつき三万とかの依頼で社員たちの給料も払えるわけがないしな。依頼の数自体が少なすぎて。

だからこそ、汚くて危ない依頼だ。

金が入る。

実はな……お前には黙っていたが、他の社員は完全歩合制だ。給料がまともにてるのは、現時点では新人のお前だけだ。

ここにいる奴らは、まあ基本的にその報酬の多さに魅了された人間だと思っっている。ああ、悪人つてわけじゃないぞ？ 金は大事だ。あいつらも、大金が必要な事情を抱えてたりするんだよ。いろいろと、な。

まあまず間違いなく向日だけは私欲だろうが。

また話がそれて行ってるが、まあこの会社の実状はこんなもんだ。どうだ、驚いたか？

何、無理する必要はないさ。今のを聞いてここを出て行きたくなつたなら、そうするがいい。私も無理には止めようとも思わない。命の保証もできないしな。

もちろん、お前に危ない依頼を回さないようにもできるけどな。

私はそれでも良い。お前がここに残ってくれるだけで大歓迎だ。

お前が決める。

これはお前の問題だ。

ここで働くか、否か。

今すぐに決める必要はないが……いずれ結論は出してもらおう。わかったな？

第四話 葛藤

「ねえ、どうしたんですか芳樹君？　なんか頭抱え込んでますけど」
「どうやら、社長がまたなんかしたらしい」

「ごすつ。」

「言いがかりはよせ、向日。私はただこの会社の実態をありありと話したただけだ」

「ちょ、社長、物理はだめ物理は！　音が、音が生々しい！」

「まあ、そのうち元気になるわよ。……今は、そつとしておいてあげましょう」

「そつですね……」

順に咲、槇、（殴打音）、黒、槇、霊華、咲の言葉である。いや、殴打音は言葉ではないが。

俺は、同情されていた。

……正直こんなに良い人たちが、金目当てで危ないことに手を出しているとは思えないし思いたくない。だが、黒の話を聞く限りそうなのだろう。それぞれに金が必要な事情があるということを加味しても、やはり解せない。

二ヶ月前、俺は魔法の力を買われて黒にスカウトされた。今思えば、あの頃からおかしかった。

ただのトラブル解決屋——言ってしまえば、便利屋でしかない「NaN」に、魔法の力が必要であるとは思えない。黒は初めから、俺に危険なことをさせるつもりで会社に招いたのだろうか。

ふと、昨日のやりとりを思い出す。

——ばかもの。

——自分のことをそんな風に言うな。

——お前はバケモノなんかじゃない、むしろばかものだ。

——… お前は、ちゃんとした一人の人間だろう。

黒は、俺のことを一人の人間としてみている。

今回の俺から黒への依頼も然りだが、この力を持っていて幸福だったことなど、かつて一度もない。いや、ライターをなくしたときには便利だが。

基本的に、俺の力を知った周りの人間は、俺から離れていく。興味本位で近寄ってきた奴も多少は居たが、俺の魔法の危険性について深くしるにつれ、離れていった。

だが、黒は俺の魔法を受け入れてくれた。

事務所の他の面々も、だ。

ここには、俺と同じとまでは行かないものの、似たような境遇の奴ら——理不尽な不幸を背負った奴らが多いからなのかもしれない。黒の言うように、大金が必要になるほどの、何かを。

……槇だけは本当に私欲のためにここで働いていて、本当に興味本位で俺の魔法を受け入れてくれていただけかもしれないが。あの先輩は馬鹿だから。

ここが、俺の居場所なのかもしれない。

だとしたら、俺はここに残るべきなのだろうか。

多少の危険は覚悟の上で、やっていくべきなのか。

結局、その日のうちに答えは出なかった。

「うつわ……ひどいなこりゃ」

「いつもこんなもんですよ。今日はマシな方です」

「いや、すまん……。正直昨日の段階だと、どうせたかが嫌がらせだろうと思うってたけど、実際に見るとこれはひどいわ」

「思ってたんですね……」

まあ、普段から暴力団の抗争とかに関わっている会社の社長だったら、そういう感想を持つのも仕方ないかもしれない。今だからこ

そそう思えた。

だが、それとこれとは話が別である。

まあ確かに、これはひどい。どう見ても、誰が見ても。いや、俺はもうこのレベルなら見飽きたが。

現在の時刻は午前零時三十分。場所は吉川芳樹、つまり俺の自宅前。

玄関口のドアには、なにやら得体の知れない物体が張り付いている。言葉では言い表せないほどグロテスクで、かなりきつい異臭を放っている。

本当に…… なんと言い表せばよいのか。「腐ったパイ生地と嘔吐物を混ぜ合わせて赤と紫と黒で着色したもの」とても言えば想像は…… できないだろう。たぶん、今読者が想像しているものの八倍はひどい。もし何かの間違いが起こってこの作品が出版、はたまたアニメ化されたなら、そこには確実にモザイクがかけられるだろう。ブルーレイやDVDでも除去されない…… というかそんな修正はだれも望まないほど、とても言えば少しは伝わるだろうか。

…… 弁解のために言っておきますが、「赤と紫と黒で着色した」の黒の部分に、社長に対する悪意は込められていませんよ！

「とりあえず、掃除…… じゃない、除去、いや削除しないと……」

「どれだけこの物体に嫌悪感を持っているんですか」

「どれだけってそりゃあ、この世に存在して欲しくないくらいだな。臭いし。ああ、どけたいけど触れそうにないな……」

「任してくださいよ。馴れてますから」

俺は右の掌をその謎の物体に向け、ただひたすら「消える消える消える消える……」と念じた。すると、徐々に物体が—— 臭い煙を上げながら—— 霧散していく。

「げほっ、げほっ…… 臭っ！ ああ、この臭いはお得意の魔法でどうにかなんらか！」

「すいません、今消す方に集中してるんで話しかけられないください」じゅう、と音をあげて物体が完全に消失したのは、それから三十

秒ほどたつた頃だった。

「ぐっ……はあ、ひどかった」

「ハア、ハア……。ま、毎度のことながら疲れます……。あ、ちょっとミスった」

「何だ？」

肩で息をしながら先ほどまで物体が張り付いていたところを見ると、玄関の扉が少し欠けていた。というか、真ん中あたりが抉られていた。

「あーあ……社長のせいで集中が鈍った」

「アタシのせいなのか!？」

「ふう、疲れた。ここ賃貸なのに……大家さんに怒られそうだなあ。まあ、とりあえず入ってください。作戦会議です。ああ、今日はちゃんと帰ってくださいよ？ 酒も禁止です」

「無視か!」

そんな黒の発言さえ無視して、俺はドアの鍵をあけて中に入った。

落ち着きを取り戻したところで、俺と黒は話を始めた。

「じゃあ、本題に入る……っと、その前に、意思確認だ。今日の話だが……決定をすぐに迫る訳ではないにしろ、その決定の時までもうするかくらは早めに決めておく必要があるだろ？」

「それはつまり、とりあえず働くかどうか、ということですね？」

「そうだ。もしその決心に数ヶ月もかかるようだったら……そのときまでの生活費はどうするか。『とりあえず』うちで働き続けるか、他に職を探しておくか」

「他の仕事が見つかったら、もうそのままそっちに流れてしまいそうですね」

俺はため息をついて考える。

確かに「NaN」は危ないし、あまりクリーンな会社とはいえない。しかし、魔法が使えてしまう俺は、人間関係に難があるというのも確かだ。

一度俺の力が職場で露見（まあ俺が使わなければ済むことなのだが、特に意識せず習慣で使ってしまうことがある）してしまえば、すぐに俺は職場で避けられるようになる。いわゆる「ぼっち」という奴だ。

それに比べると、多少危険であるにしても……いや、危険な仕事は回さないとまで言うてくれているのだから、ここにいた方が良いと思える。「居場所がある」というのは、俺の中ではかなり優先される事項なのだ。

今まで俺には、居場所がなかったから。

「……あんまり危ないことに手を出したくないので結論はもう少し先送りにしておきますけど。『とりあえず』、ここで働きますよ」

「そうか！ いやあ、嬉しいな」

「意外です。社長がそこまで喜んでくれるとは」

「まあ、一応仲間だからな。離れるのはやっぱりあまり嬉しくない」
黒はぽりぽりと頭を掻きながら言った。もしかすると、柄にもなく照れているのだろうか。

いい歳した人に照れられてもそこまで嬉しくはない。

「何か失礼なこと考えてるな、また」

「いやいやいやいや。そんなことないですよ」

「なら、いいが……」

危つく黒のチョップが飛来する寸前というところで、何とか回避できた。

「じゃあ、これからも『とりあえず』がんばってくれよ」

「はい！」

その後、一時間ほど対策を練ろうとしたが、なにぶん手元の情報が少ないので、また何も進展しないまま時間が過ぎていった。

今日の黒は、きちんと帰ってくれた。

第五話 黒の夜

【少しだけ黒の時間】

芳樹の家から出た私は、自宅への帰路につかず、そのまま仕事をする場所へ向かった。

仕事をする場所と言っても、「NaN」の事務所ではない。依頼人に指定された場所だ。

そこは、とある港の倉庫。よく小説などの創作物で闇取引の場所などに指定されるシチュエーションだが、実際にこういう場所には特に夜は人が寄りつきにくいので、そういった「悪事」に利用される。

港までの移動手段は徒歩または電車。これも依頼人からの指定である。誰も寄りつかないはずの倉庫の近くに車やらが停まっていると、怪しまれやすいからだとか。とはいえ、車で行くほどの距離でもないことも確かなので、徒歩で十分間に合うが。

約束の時間は午前二時。そこで行われるのは、「悪事」と言っても差し支えのないこと。少なくとも絶対に正義や善事とは呼べないだろう。……一般人からすれば。

人は、大金が絡むとそれを否定する。

悪だという。

それは、人に金欲があることを誰もが知っているからだ。欲におぼれることを人は悪と断ずる。

今からアタシがやろうとしているのは、そういうことだ。

金を受け取り、悪事を働く。大抵の依頼主は私を見て「女か」と言うが、きちんと仕事をこなせばそれで文句はないらしい。

アタシは金のためなら何でもする。

生きていくためなら何でもする。

それが、アタシに必要なことなら、何でもする。

人が死ぬのは気分が悪い。だが、金をもらうのは気分がいい。決

してきれいごとでは済まない世界が、ここだ。

だからアタシは引き金を引く。

金を得ることで、大切なアタシの日常を守るために。

今日もアタシは、懐から三十八口径五連発リボルバーの拳銃を取り出し、標的に向ける。

……ああ。

アイツだったら、こんな汚い銃を使わなくても、事を済ませられるんだろうな。

指先から火を生み出し。

掌から塩酸を生み出し。

天から雷を呼び起こし。

先ほどやって見せてくれたように念じるだけで、相手を消せるんだろうな。

血など、見る間もなく。

一瞬で、依頼を解決に導いてくれるのだろう。

ああ。

羨ましいな。

第六話 諭吉が四人

携帯電話から、目覚まし用に設定したメロディが聞こえる。少し前に話題になった、ロックバンド（と言っても、J・POPの大衆向けバンド）の曲だ。

「ん……」

現在時刻は午前八時。昨日は黒が居たのであんな事になってしまったが、普段はいつもこのくらいに起床する。黒が居たからというのが理由になるかは、さておくとして。

俺は布団の中でうずくまった。季節は秋、二度寝が恋しい時期ではあるが、それで会社に遅れては元も子もないので目は開けたままにしておく。これが、いつもの朝の過ごし方だ。

その姿勢のまま、昨日の、もはや何回目かわからない嫌がらせのことや、仕事を続けるかどうかということなどについて考える。しかし、どちらの案件も考えることで解決するタイプのものではない。「はあ……なんか、疲れるなあ」

そのまましばらく考えてから、ゆつくりと布団から這い出る。改めて携帯を開き時間を確認すると、気づかぬうちに三十分が経っていた。

「うっ、寒い……」

そろそろストーブを出した方がよいだろうか。朝食として食べるパンを二枚トースターに突っ込み、顔を洗い、着替え、その間にトースターから飛び出したパンにバターを塗って食べ、牛乳を飲み、歯を磨いて髪を整える。いつもの流れの中でも、水に冷たさに驚いたり、着替えるときにいつも以上の寒さに身を縮めたりと、季節の移ろいを感じる。

もう、あの事務所で働き初めて……二ヶ月か。

「おはようございまーす」

「あ、芳樹君。今日は遅刻しなかったんだね」

「はい」

「よう芳樹」

「おはよう、芳樹君」

「NaN」の事務所に着くなり、靈華、榎、咲の三人に声をかけられた。榎と咲は昨日は仕事上がりの出勤だったが、今日は普通に來ることができたようだった。二人ともソファに座って話をしていたらしい。仲の良いコンビだ。「あ、そういうのじゃないから」

「うん。ただのお友だちだねー」

「いや、まだそこまでは考えてはいませんでした」

「でもたぶん二秒後くらいにはその結論にたどり着いていただろうな」

「うんうん、芳樹君そういう目をしてたよ。お姉さんにはわかつちやうんだから」

「はあ……」

もう、考えていることを読まれるのにも慣れてきた。俺はそんなに顔に感情が出やすいタイプなのだろうか。

「出やすい出やすい」

「そうですか……」

……もう、慣れてきた。悲しいことに。

「私と榎君幼なじみだからさ、よく間違われちゃうんだよねー。だからもう慣れたよ」

「ああ。慣れたな」

彼らもいろいろ大変らしく、慣れることには慣れ、柔軟に対応しているらしい。見習うべき、なのだろうか。

「幼なじみで同じ仕事か、なんかすごいですね。……ん？」

そのときふと、違和感を感じた。

「あれ？ 社長は？」

「ああ、仕事中よ。なかなか帰ってこな……」

靈華がそう言いかけたところで、事務所のドアが開いた。

「よう、幸崎。仕事終わったぞ」

噂をすれば影。ちょうど、黒が入ってきた。昨日の槇と咲の仕事終わりの様子と比べると、かなり元気そうと言うべきか、仕事疲れのオーラが全く感じられない。それほど大変な仕事ではなかったのだろうか。

「あつ、お疲れさまです黒さん。どうでした？」

「まあ、大丈夫だ」

「おはようございます、社長」

「おはよう社長」

「おつはー黒さん」

「徐々にフランクになって行ってるのはどうしだ……？」

ちなみに、俺、槇、咲の順だ。咲の方が槇よりも後輩なはずなのだが、黒に対してのフレンドリー度が高い。同じ女性というのが関係しているのか、どうなのか。

「まあ何でも良いけど、とりあえずアタシはシャワー浴びてしばらく寝させてもらう。悪いけど客の対応頼むぞ、幸崎」

「わかりました。ゆっくり休んでください」

……今、霊華の目が悲しそうだったのは気のせいだろうか。

黒は事務所の奥に歩いて行き、昨日使ったシャワールームに入る。それを見送ってから、俺は霊華に、さきほどの気づきのことー直球で聞くのは気が引けるので、とりあえず関係のありそうなことーを聞いた。だした。

「幸崎さん、社長さつきまで、何の仕事をしていたんですか？」

霊華は少しだけ逡巡するような素振りを見せ、答えた。

「うーん、聞かない方がいいんじゃないかしら……。ああ、それより、ちよつとやってもらいたい仕事があるんだけど、いいかな？」

「え、ああ、はい」

うまく、はぐらかされたような気がした。

霊華から頼まれた仕事は、思いの外簡単なものだった。普段やつ

ている仕事とさほど代わり映えない。いや、これが普通なのだろうが、やはり昨日今日と事務所の裏の顔を見てしまったので、何となく肩透かしを喰らった気分だ。

依頼人は二十代の男性。何でも、彼女と喧嘩をしてしまい、話しかけようにも話しかけられる雰囲気ではなく、携帯電話も着信・メール受信拒否をされているらしい。本人は謝りたいと思っているのだが、相手が聞こうとすらしないのでどうにもならないそうだ。

そこで、トラブル解決屋の出番だ。トラブル解決屋は、男女間のトラブルだろうが何だろうが請け負う。それがモットーなのである。俺がやるべき事は、その彼女さんを捕まえて依頼主の男性に会わせること。そこまでだ。それ以降は本人たちの問題ということで、干渉しないことになっている。

この仕事で重要な点は、彼女さんに「彼氏から話があるそうだ」と言って同行を願っても、どうやら拒否されそうだということ。そこで、うまく口車に乗せて指定されたカフェまで連れて行かなくてはならない……のだが、俺は口べたである。それがうまくいくかどうか。

何にせよ、できれば依頼主の男性本人から話を聞いておきたい。依頼を受諾したのは受付の霊華なので、実は詳しい話までは知らない。当然彼女さんがどこにいるのか、どんな容姿をしているのかも知らないのです、このままでは何模できない。

俺は、依頼主の男性と落ち合う予定のカフェに向かって足を進めた。

「平日なのに、大丈夫ですか？」

「ああ、仕事は有給をとったので……。そちらこそ、こんな事を頼んでしまつてすみません。本来、私が一人で片づけるべき事なのに……」

「気にしないでください。こっちも、これが仕事ですから」
カフェに着くと、身だしなみもしっかりした男性が待っていた。

さすがに平日だけあって、人も少ないし、その少ない客のほとんどが女性だったのですぐにわかった。

男性の外見は、とても痴話喧嘩をするような人には見えない。口調も丁寧で物腰も柔らかい、話しやすい人だった。

「これが、彼女の写真です。今日はたぶん仕事をしています」

男性はカフェーブルの上に一枚の写真を滑らせた。

「仕事、というのは？」

「ただのOLですよ。まあ、会社に忍び込むのは難しいでしょうからね……昼休みの時間を狙っていただければいいかと思います」

「その時間帯、彼女さんはどちらに？」

「おそらく、あそこに見えるコンビニに来ると思いますので……その近くで彼女を捕まえていただければと」

「すぐ近くじゃないですか」

正直、自分でやれ、と思った。

居場所まで分かっているのに、どうして依頼を出したのだろう。

「……実はですね、私が近づいただけで、全力で逃げちゃうんですよ彼女」

「……それは、よっぽど嫌われ……いや、避けられてますね」

「だから、逃げる隙のないこのカフェに何とかうまく連れ込んでくださったら、あとは私がどうにかするしかない問題ですので。お願い、できますか？」

男性はとても申し訳なさそうにこれらの表情を窺っている。そんな顔をされて、断ろうにも断りようがなかった。

「わかりました。やります。……ちなみに、報酬はいくらですか？」

トラブル解決屋「NaN」の料金徴収システムは変わっている。

いわゆる定額制ではなく、またこちらが見積もった額で仕事を請け負うのでもない。依頼主が提示する報酬の金額を見て、それに対して仕事を受けるかどうか、会社側が決めるのだ。

「どうしても、お願いしたいことですから……。四万円です。よし、ようつ。」

「えっ、そんなにいいんですか？」

「はい」

男性は財布の中から諭吉四人を取り出す。報酬の受け渡しは依頼の成功後だが、おそらく現金の用意があることを示すためだろう。嗚呼、懐かしの諭吉よ。六人とは言わない。四人でいい、戻ってきてくれ……。

まあ、報酬の四万はすべて事務所側に行き、俺の手元には決まった給料しか入ってこないのだが。

そういえば、黒が「他の社員は歩合制」だと言っていた。歩合制という事は、働きに応じて給料が増減するという仕組みと受け取っているのだろうか。だとしたら、黒も榎も咲もかなり稼いでいるのではないだろうか。

霊華だけは、どこがどう歩合制になっているのか、今一つピンとこないが。

「では、よろしく願います。方法はお任せしますから、絶対に連れてきてください」

「はい、任せてください」

「あつ、でも口説き落としはできればやめてください。その、彼女があなたに惚れたら、本末転倒ですので……」

「……それもそうです」

まあ、端から口説き落としなどしようとも考えていなかったが。というか、できるとも考えていない。

「じゃあ、行つてきます」

「頼みましたよ！」

男性はまじめそうな顔をいつそう引き締め、俺に言った。

さあ、わりと面倒臭そうな任務の始まりだ。

第七話 無力感

現在時刻は午前一時五十分。金曜日、平日。ほとんどの真つ当な社会人はまだ昼休みに入っておらず、働いている頃だ。

そんな時間帯に、女性の写真片手にコンビ二の前ですつとうつろしている俺は……傍から見れば、完全に不審者だった。

「でも……早めに待機しとかないといけないし、顔を見逃しても嫌だから写真を収めておく訳にもいかないしなあ……」

とんだジレンマだ。

女性はコンビ二まで昼食を買いに来るらしいから、ここでこうして待つておくしかない。ただ、正直、若い女の人が昼食をコンビ二弁当で済ませるのはどうかと思う。やはり手作りが基本だと思うのだが、案外それがふつうでもないのだろうか。

かく言う俺もコンビ二ではとんどの食事を済ませてしまふのだが、やはり理想の女性像というのは保っておきたい。……黒に話したら、家庭的な女などガキの妄想だと一蹴されそうだが。

それはさておき。

たとえ女性を見つけれたとところで、依頼内容にあるようにきちんとカフェまで連れていかなければ、解決とはいえない。

確か、男性から口説き落としは禁止されていたはずだ。そもそもできると思っていないが、まあ確かに常套手段ではあった。思いつく前に潰されたというのが何とも悲しい。

では、どうやって連れ込もう。……連れ込もう、という響きがあり良いことをしているようには思えないが、この際連れ込む、いや、無理矢理でも引つ張り込むくらいの気持ちで行った方がいいかもしれない。

方法としては。

その一、強行手段、腕力に頼る。これは最終手段だ。

その二、キャッチセールス。自信がない。却下。

その三、ナンパ。いや、口説き落とすとナンパは違うんだ、その、言い回しとかが。だがとりあえず却下。

その四、「あなたの彼氏から話があるそうです」。逃げられる、間違いない。というかもうさつき検討したはずだ。却下。

その五、そろそろ作戦が思いつかない。

その六、もう諦めて良いのではないだろうか。

その七、……。

と考えているうちに、依頼主の彼女さんが近くに現れた。オフィスビルから出て、このコンビニにやってくる。

どうする？ まだ、何も対応が決まっていない。

「でも……やるっきゃねえか！」

突撃した。

「すみません！」

彼女さんが俺の方を向いた。だが、まだ自分が呼ばれているのかどうか確信が持てていないようで、怪訝そうな顔をしている。

「あの、その……あなたです」

「えっ、私？」

彼女が自分で自分を指さす。

「はい。ちよつと、お伝えしなければいけないことが……」

「えっ……な、何でしょうか」

戸惑ったような表情を見せる。まずい、ノープランだ。

「いや、その……ここじゃあ何なので、そのカフェにでも……」

「えっ、でも、その、私用事が」

「大事な用事なんです、すみませんお願いします！ そんなにお時間とはらせませんから」

無計画に突っ込んでしまったが、彼女はそこまで気の強い性格ではないらしく、あと少してカフェに連れていけそうだ、という。

その時だった。

「おい、あんた何してんだ」

「はい？」

背後から男の声がした。直感的に、やってしまった、と感じる。

「人の女捕まえといて何してやがるのかって聞いてんだよ」

「サトシ！」

「サトシ！？」

「って誰！？」

彼女さんが俺の脇をすり抜け、男の後ろに隠れる。男はとても腕が強く、なんとつかさつかさ勝てそうになかった。

「あ……す、すいません。人違いでした」

「ああん？ 何言ってるんだ。ん？ おい、それ、写真……」

「あ、いや！ か、彼女さんと僕の探してる人、に、似てますね、アハハハハ……。じゃ、じゃあすいません失礼します」

「おい、コラ！」

そんな風に誤魔化してその場を脱兎の如く走り去るのが、その時の俺にできる唯一の選択だった。

「そうですか……あいつ、もう他の男を……」

「すみません、依頼、達成できなくて……」

「ああ、いや、あなたのせいじゃないですから。私が不甲斐ないばかりにこんなことになったんですから」

事の一部始終を依頼人の男性に伝え、男性はかなり落胆したような表情だった。まあ、それも仕方がないだろう。何せ、喧嘩をしたというだけできちんと別れを告げられてすらいない恋人に、新たな彼氏ができていたというのだから。

「じゃあ、報酬をお支払いします」

「えっ、でも依頼は達成されていませんが……」

「構いません。どうせ用意していた金ですし、正直今は何もかもがどうでも良くなったというか……」

「はあ」

これで、いいのだろうか。

依頼内容は達成されていないままだ。いや、依頼者側に不備があ

ったのだから、社会的責任の観点から見れば、これで俺の仕事は終わりなはずである。当然、ここで報酬を受け取って帰っても、責められることはないだろう。

だが、釈然としない。本当にこれで、いいのだろうか……。

しかし時は待ってくれない。俺がウジウジと悩んでいる間にも、刻一刻と時間は進む。

「じゃあ、私はこれで失礼します……。今日は本当に、こんなことでお呼びしてお時間をとらせて申し訳ございませんでした」

「いえ、そんな……」

そこで一言、「何か」を言えば、状況を変えられたのだろうか。少なくともその時、俺の中に状況を変えるような「何か」は存在しなかった。

いつも感じさせられる無力感。

魔法を使えたって……何も、解決できない。人助けもできない。失恋の悲しみ一つも癒せはしない。

俺が事務所に戻ると、社員全員がそろっていた。仕事に出ていたのは俺だけだったようだ。

「おつ、おかえりー……ってうわあ、どうしたのその顔」
咲に声をかけられた。

「あ……瀧澤さん。いや、別に何かあったってわけじゃないです」
「依頼失敗したの？」

「いえ、報酬はきちんともらってきました」

俺がそう言うと、咲は頭上にクエスチョンマークを浮かべた。

「ちよっと、いろいろあって、自分の無力さを感じてきたところ何ですよ」

とりあえずそれだけ言っておいた。

俺は受付カウンターの霊華に報酬の四万円を渡し、来客ソファーに寝転がった。

「おいお前」

黒が俺の側に立つ。見下ろされるといふより、見下されるといふ方が正しいと思えるような、堂々たる立ち姿と鋭い目つきだ。

「そんなに無力な自分が嫌か？」

「嫌ですよ、そりゃあ」

「だったら話は早い。お前の才能を、仕事で生かせ」

翻訳すると、「お前の得意な魔法の力」絶大な武力で危ない仕事をしなさい」ということだろうか。

その推測はあながち的外れなものというわけでもないようだ。

「ちよつと、今晚吹っ飛ばさなきゃいけない奴らがいるんだ。新人研修の一貫として、槇と咲と一緒に行ってこい」

「今晚ですか。早いですね。準備とかは？」

「ああ、まあ大丈夫だ。大した奴らじゃないから」

俺が言ったのは心の準備のことだったのだが、黒は何を勘違いしたか、武装の準備が何かと受け取ったらしい。最早俺に「行きたくない」と言い張ることすらさせまいとしているのか、あるいは本気で行くに決まっていると思っているのか、判断が付かなかった。

疲弊していた俺に何か返事をする気力など残っておらず、結局無理矢理首を縦に振らせられる形となった。

第八話 それぞれの理由

「安心しろって。俺と咲がいんだから大丈夫だっつの」

「そうそう、大船に乗った気でいてよね！」

よくあるのは大船を泥船と言い間違えるパターンだが、まあパターン通りに世の中のことは運ばない。そういうものだ。

結局、一仕事終えてもなお悶々としていた俺は、夜十時になると、槇と咲に強引に「戦場」へと引つ張り出された。

現在は目的地に向けて、槇の車で移動中だ。

具体的に何をするのかはまだ知らされていない。だが、今まで俺が請け負ってきたようなつい数時間前にやった、痴話喧嘩の取り持ちなどのような依頼とは、次元が違うということだけは、想像がついた。

槇も咲も拳銃を携帯していて、正直どうして民間人が銃を持っているのかなど問い詰めたいことは山ほどあった。しかし「お前も持つとけ。魔法よりむしろこっちのが武器だろ」と槇に無理矢理拳銃を渡されてしまい、犯罪に荷担しているのと何ら変わらない状態になってしまっただけからは、最早聞く気など失せた。

初めて装備するホルスターと防弾チョッキの重量は想像していたよりもずつと重く、これから自分が一千の向こう側に足を踏み入れるのだということをひしひしと感じさせられた。

「いいか、芳樹。今日は『一応』そんな物騒なモンを持っているだけで、別に人を撃ち殺せとかそんな依頼じゃない。ただ、話し合うだけだ」

「社長は『吹っ飛ばしてほしい奴がいる』って言ってましたけど……」

「言葉の綾だろ。まあ、安心しろ。俺らもいるしな」

「うーん、その話し合いの相手が厄介なんだよねー。写真で見たけど、なんか目から耳にかけてでっかい傷跡がびいって」

「ヤクザがらみですか」

「ご名答。ヤクザがらみつつうか、本職だよ」

思わずため息がでる。本当に生きて帰ってこれるのだろうか。

「大丈夫大丈夫、いざとなったら、芳樹君なら手から炎出せば向こうも驚いて逃げるよ！」

「だといいですけど……」

咲のあまりに楽観的な態度に、正直に言つと、危険なものを感じずにはいられなかった。しかし、これも経験の差なのだろうと納得し、受け入れることにする。

経験と言えば。

「あの……向日さん、瀧澤さん」

「ん？」

「何？」

「お二人はどうして、ここに入ったんですか？」

ここ、というのが、トラブル解決屋「NaN」を示すということ
は二人にも伝わったようだった。

「そうだな……やっぱ、金だな」

槇が先に語り始める。

「俺さ、正直言つて、バカだからな。でっけえ会社とかにも入れないし、もし入れてもデスクワークなんざ性に合わねえ。かといって
鳶とかやつても金は入んねえからな。だったら、一攫千金狙えそう
な、なるべく胡散臭い会社に入るしかないと思つてよ」

「槇君はそういうところ、意外と賢いと思うよ。堅実じゃないけど、
そういうのも必要つてこと分かつてるのはすごいよね」

咲が槇をほめる。槇は照れくさそうに顔を背けた。運転中なので
前を向いてほしい。

これでデキていないと本人たちがきつぱりと言い切るのだから、
驚きである。

「瀧澤さんは？」

「私？ あー、まあ槇君とあんま変わんないかな。というか、槇君

がここで働いてるって聞いて、『じゃあ私もー』ってくつついて来ただけだよ」

「それでよく、こんな危ない仕事、続けられますね……」

「あはは、おもしろい、つてのが一番かもね」

話を聞いていて、この人、実は何本かネジが外れているのではないだろうか、と思った。まともな人間なら、命を懸けることをおもしろいとは感じないはずだが。

まあ、単にそういう性格なだけなのかもしれない。正直、「魔法が使える」というまともでない俺がまともについてどうこう語るのもおかしい話だ。それに人の性格など、一概にどうとは言えない。

「まあ、そんなとこだな」

槇がそう締めくくって終わりかと思いきや。

「ねえねえ、芳樹君は何でここに来たの？ 黒さんが連れてきたつてのまでは知ってるんだけど、具体的なことは何も聞いてないんだよね」

「あ、俺も聞きてえ、それ」

本当に、この二人は息がぴったりだ。

まあ、特に隠し立てする必要もないだろうと判断し、話す。

「……あまり、聞いてもおもしろくない話ですよ？」

魔法なんて、使えても意味はないんです。

だってどうせ、人前では使えませんかね。

小さい頃はどうして俺が魔法を使うと周りの人たちが離れていくのか、どうして誰も俺以外に魔法を使おうとしないのかが分かりませんでした。それで、習慣的に魔法を使ってしまっようになっただんですよね。

成長するにつれ、魔法を使うと疲れるとかそういうことも意識し始めたから、あまり使わなくなりました。それだけじゃなくて、自分が他の人たちと違うというのも、一〇歳のころによく気づきました。……いや、本当はそれ以前に既に気づいていたけど、認め

たくなかっただけなのかもしれません。

まあそんな風に育ったおかげで、学生時代とかはかなりやさぐれてましたね。そりゃ、環境のせいとかもあるでしょうけど、単に俺が若かったってだけの話です。

そんな俺も高校を出てから……まあ学がないのでまじめに就職したんですが。ちょうど、二年目の秋になる三ヶ月前に、ちよつとしたことで魔法のことが職場にばれて、まあなんというか、会社を辞めざるを得なくなりました。まあそれでもまだこの歳で普通に就職はできたんですけど、やっぱりまた同じように魔法のことがばれて会社にいらなくなるのも嫌でしたから、ニートのまま一ヶ月過ぎました。まあまだ若いから何とかなるとか考えて、適当に生きてましたよ。

そんな時に、社長に会いました。

俺の目の前で、柄の悪いおっさんを蹴っていました。白昼堂々。

おっさんはナイフを持っていて、でももう完全に社長に対して無抵抗になってたんですけど。正直、ナイフ持ったおっさんより社長の方が怖かったです。

喧嘩なのか、仕事なのか、善良な市民の志で犯罪者を鎮圧していたのかはよく分かりませんが、まあどうでもいいですね。大事なのは……俺が、人質にされてしまったということです。

おっさんは自分のことを俺が見ているのに気づいて、いきなり立ち上がってナイフを俺の首もとに当てました。普通、悪漢と向かい合うのが男で人質になるのが女ですけど、立場逆転してましたね。他に人がいない裏路地みたいな場所でしたし、俺が弱そうだって言うのもあったんでしょうけど。

社長は「しまった」みたいな顔をして、おっさんはそれを機に逃げようとして。

俺はおっさんを燃やしました。当然、魔法で。

死なない程度に焼いて、路上に転がしました。焦げ臭い臭いが充滿して、……なんだかねで人を燃やすのは俺も初めての経験でし

たから、驚いちゃって。

その後はまあおっさんの手足を縛ってから、公衆電話から救急車を呼んで逃げました。魔法で傷を治すとか、そんな器用なまねは難しくできませんから。放っておいても良かったんですけど、さすがに死なれても困りますからね。

それで、一息落ち着いてからです。

社長が俺を事務所に来るように誘いました。最初は断ったんですけど、「お前の力が必要だ」だの言われて、まあ俺も職がないときでしたから、この際どんな職場でも良いかと思ってOKしました。ざっと、こんな感じですかね。

そんなこんなで、今はここでこき使われてるってところです。

第九話 893の本拠地へ

「壮絶だな」

「壮絶だね」

「つて言う割には、二人ともあまり驚いてないような……」

「だってよお」

信号で停止したところで、槇が運転席から後部座席の方を向く。

だから、前を向いて運転してくださいってば。

「社長がナイフ持ったおっさん程度に引けを取るわけねえし」

「まあ、芳樹君がいなかったら、まず間違いなくそのまま決着ついていたと思うよー」

「いや、本当、すみません……」

俺が悪いのか。いや、俺が悪いのか？ え？

つい勢いで謝ってしまったが、俺が悪いのか……？

「いや、悪いと思うよー」

「だから心の中を読まないでください」

えひひ、と咲が笑う。これから暴力団の本丸に（話し合い目的ではあるが）切り込もうとしている人間の表情ではない。焦げ臭い仕事に慣れているにしても、限度というものがあるだろう。

この人たちが、俺がつい先日まで見ていた「普通のいい人たち」なのだろうか。俺が見ていた槇や咲とそっくりな別人なのではないだろうかと思える。

「まあ、いいんじゃないか。それで芳樹は今ここにいるわけだし」

「そうそう、芳樹君がドジって人質になったりしたから、私たちの今があるんだよ！」

「もう、本当にすみません……勘弁してください」

この人たちの話し相手をしていると、本当に飽きない。というか疲れる。

信号が青に変わり、車が発進する。しばらく、無言の時間が続い

た。槇と咲はただじつと前を見ていて、真剣な表情をしている。先ほどのまでの無邪気な笑顔から、急に無表情になったことに、違和感と不気味さを感じた。

「芳樹」

「何ですか？」

「そろそろ、これからやる仕事について説明しと思う」

「ここですか？」

「ああ」

車が止まったのは、出発してからおよそ二時間後の、午前零時。場所は、事務所のある宍島市内から隣の笹玉市に移動、繁華街の裏通りにあるビル。「そういう組織」の建物は、雰囲気だけで分かるもののだな、と俺は思った。

見ると、玄関口の横に、表札……というよりは看板が取り付けられている。そこには「中堂組」と、厳めしいフォントで書かれてあった。「……よし、入るぞ」

槇が扉を開けると、見張りらしきチンピラが二人立っていた。チンピラたちは俺たちを見留めるなり、当然のように突っかかってくる。

「ん？ おいおい、誰だよあんさんら」

チンピラに臆することなく、槇が応対した。

「用事があるんだよ。上を出せ」

「ああん？ いきなり出てきた訳分からんガキに会わせられる思うとんかワレエ！」

本当に大丈夫なのか、話し合いで解決するのではなかったのかと思っただ、その時だった。

「おい、何してやがる」

切れ長の目をした、金髪の男が入ってきた。スーツを着ているが一見するとヤクザというよりホストのようだ。しかしその男の纏う雰囲気は、見張りのチンピラとは絶対的に違う何かを感じさせる。

「あ、兄貴！ こいつら、いきなり入ってきて、上を出せだの何だのって生意気なんスよ！」

「始末していいスか？」

「……」

金髪の男は黙ったままそこに立っていた。空気が凍てつき時間が止まる。

と、急に――

「ぐえぼっ！」

「がはっ！」

一瞬だった。

金髪の男が、チンピラ二人の鳩尾を的確に殴り、その場にうずくまらせてしまった。とっさのことに、思わず身構える。

しかし、金髪の男の対応は予想外のものだった。

「やあ、すみません。ウチのクソ野郎どもが、失礼をいたしたよう……さあ、上へどうぞ。ボスに、お話ですね」

俺たちに、というよりは槇と咲に対し、非常に丁寧な態度で上の階へ行くように言った。

ほんの二、三十分前。車中での作戦会議。

「依頼人は時坂組。まあ分かるだろうが、こっちもヤクザだ。宍島市内をうろついて支配した気になっている小規模な暴力団だ。依頼内容としては、中堂組……こいつらは笹玉の方をシマにしているんだが、その中堂組が近頃宍島に入ってきてるらしくてな」

「入ってきてるって、具体的は？」

「なんかね、宍島市内にお金集めを目的にいろんなお店……あまり人前では言えないようなお店を、どんどん作ってるんだって。で、今日はそれを『やめてください！』ってお願いしに行くの」

「そんな安直な……聞き入れてくれるわけないでしょう？」

「それが、それでもねえんだなあ」

「そうそう。これこそが、黒さんが一代で築き上げた『NaN』ブ

ランドの秘めたる力、ってところかなー」

「本当にそんなにうまく行くんですか……？」

「まあ見てろって。お前はとりあえず、こういう裏の現場に慣れるためだけについてくるってだけだからよ。安心しな」

俺は内心、舌を巻いていた。まさかあの胡散臭さ満点の貧乏会社が、裏の世界に名を轟かせていようとは。社員もたったの五人、否、たったの四人だというのに。……俺は「まだ」その世界に足を踏み入れていないのだから、カウントすべきではあるまい。

「中堂は元気か」

階段を上りながら、槇が金髪の男に問う。それも、極めて不遜な態度で。

「ええ、ボスは健在です」

「そうか。ああ、あと、下にいた奴らだけだよ。あそこまでやらなくていいんじゃないか？」

「いえいえ、『NaN』の向日葵、瀧澤様に失礼があったとあっては、私たちの組もこの界限でやっていくことは難しくなりますから」

……本当に、どれだけの影響力を持っているのだろうか。こんな組織に所属している自分が怖くなる。

「そつえば、そちらのお方は？」

「あつ、彼は吉川芳樹君。ちよつと前からウチで働いていて、裏の仕事は今日が初めてなんです」

咲に、勝手に紹介されてしまった。

「初めまして。國山と言います。あなたも、きっと今後こちらで活躍なさるのでしょうね……期待していますよ」

國山の目の鋭さに思わず緊張する。

「あ、は、はい、よろしく願います」

「……向日葵、本当に大丈夫なんでしょうか、彼？」

「心配すんな。意外とやる奴だ」

槇はそう言っ、俺の方を向いた。ニタリ、と口角をつり上げる。

面白がっているとは思えなかった。

「着きました」

話をしながら階段を上っている内に、最上階までたどり着いたようだった。目の前には、大扉がある。ここを開ければ、もう後戻りはできない。そう考えてしまうと、最後の一步がなかなか踏み出せなかった。

すると、とん、と咲が俺の肩をたたいた。

「大丈夫だよ。言ったでしょ、お話するだけだから。芳樹君は、何も心配しなくていいんだから」

「瀧澤さん……」

普段は抜けていると思っていた彼女が、ここまで頼もしく見えるとなると、いよいよ俺のビビりも最高点に達しているようだ。俺は気合いを入れ直すために、両の拳をぐっと握りしめ、大きく息を吸い、そして、吐いた。

そんな俺を苦笑いしながら見つめていた國山が、扉をノックした。

コン、コン。

それは、俺が裏の世界に足を踏み入れる前の、合図でもあったのかもしれない。

第十部 死んでも

「失礼します、ボス。お客様がお見えになりました」

——誰だ。

「トラブル解決屋『NaN』の向日葵様、瀧澤様、それに……吉川様です」

——よし。お招きしろ。

中にいる人物——おそらく、中堂組のトップ——と会話してから、國山がドアノブを捻る。分かっていたことだが、組の長までもが俺たちの会社に「お招きしろ」などと敬語を使うとなると、驚きを通り越し、恐怖さえ感じる。

……ガチャ。

そして、扉が開いた。

一步、足を踏み出し、敷居を越える。

そこには、咲が車での移動中言っていた特徴に合致する、左目から左耳にかけて生々しい傷跡のある、四十がらみの男がいた。

「ようこそ、我が組へ。どんなご用件ですか」

男は、威圧間のある声でそう言った。

ソファに着いた俺たち、主に槇と咲は、厚遇を受けた。

「ああ、君が吉川君ですか。……いや、『NaN』の方に吉川君などと言うのは失礼ですね。吉川さんと呼ばせてもらおう」

「あ、い、いえ。恐縮です……俺、そんな、大した人間じゃあないんで」

「ははっ、面白いことを仰る。あなたの所属する会社の人間に、それもこんな『裏』にまで出向いてくる方々に、大したことのない人間などいないでしょう。……まあ、それは置いておくとして、自己紹介がまだでしたな。私が中堂組の長をやらせていただいている、中堂元剛です」

中堂は、言葉面では俺に対しても槇や咲と同様に丁寧な扱いをしているように見せかけていたが、その目は常に俺のことを量っていた。

「あんまりウチの社員をじろじろ見んのはやめてもらえますかね」
そんな中堂を、槇が窘めてくれた。目の前にいる人間がどれだけ危ないかは見れば分かるだろう。それなのに、槇は全く物怖じしない。

「ああ、すみませんね。あまり度胸のある方には見えませんでしたので」

「中堂さんの目が曇っているんじゃないかな？ 彼は、本当にすごいんですから」

槇と同じように、咲の方も、余計な遠慮などしない、否、知らないようだ。

「まあ、そういうことは置いて、ですよ。……私たちがどうして今日、ここに来たか、見当つきます？」

咲は俺の今まで見たことのないような冷たい無表情になって、中堂に問った。

「……時坂からの依頼、穴島への展開をやめさせろ、でしょう？ どうせ」

「フン、よく分かってんじゃないツスカ。なら、話は早い」

槇は奥歯をぎりりと鳴らし、まるで中堂に噛みつくように、脅しをかけるように言った。それに対し中堂は、一瞬躊躇う素振りを見せた後に答えた。

「それは、できません。いくら『NaN』様からの忠告であっても……聞き入れることは不可能です」

返事は、NO。

「そもそも……私たちの組は、それほど強くもなければ大きくもない。拠点の事務所もこ一つですしな。もっと大きく、もっと強く」と欲を張るにしろ、ただただ組が潰れるのを防ぐ防衛線を敷くにしろ、ここらの笹玉だけじゃあやっていけないのです。その辺は、ご理

解、できますよね？」

「ああ、分からないでもないツスけど。でも……そんなことはどうでもいいんですよ」

へりくだる組長に、威嚇する若者。何ともシニールな光景だ。

「……槇君、電話、しょつか」

「……ああ、しゃあない、そろそろしてくれ。これはもう言っても無駄だろうしな」

槇が許可すると、咲がポケットから携帯電話を取り出す。それを見て、中堂はぐくりと唾を飲む。

「まつ、待ってください！ いや、それは、穴島への展開をやめるとか時坂のシマに入るのをやめるとか、それはできる訳じゃあないんですけど……頼みますから！ 電話だけは……」

中堂は咲の電話を目にして、急にうろたえる。何かあの携帯には秘密があるのだろうか、とは思ったが、事情を何も知らない俺には何があるのかということは分からなかった。

そんな中堂を後目に、咲は淡々と誰かに電話をかける。

「……ああ、もしもし、黒さん？」

電話の相手は、黒だった。

「はい。そうなんです。それで……聞き入れてもらえそうになくつて。ええ、いつもの……いいですか？ やっちゃって」

いつもの、とは何だ。一体これから、何が始まるうというのだ。

俺はそう考えてみたものの結局答えは分からず、また咲が電話をしている間にも、中堂の顔は見る見る青ざめていった。

「……あ、いいんですね？ はい、了解です」

パタン、と咲が携帯電話を閉じる。

それが合図であつたかのように、槇は――

瞬時にホルスターから拳銃を引き抜き、コックを上げ、標的を照準し、引き金に指をかけ、そして、引いた。

パン！

乾いた音が、遅れて聞こえる。

その動作の始めから終わりまで、約二・五秒。

中堂が額から血を吹き出して倒れ始める。

机一つを隔てただけの、僅か一メートルほどの至近距離で、脳天を打ち抜かれたのだ。当然、即死。

そして、中堂の体が床を打つ音が發され。

そこで初めて、室内に居た中堂組の面々は思い思いの銃を取り出す。

「遅いよ」

その頃には、咲が携帯をきちんとポケットにしまった上で拳銃を引き抜き、構える。

その銃に照準されたのはもちろん銃口が一つしかないので一人だけだが、その場にいる全員が動かなくなる。動けなくなる。

槓と同様、引き金を引くまでにタイムロスがない。

そのタイムロスのなさの所以は、引き金を引くことへの躊躇のなさに起因している。

乾いた音とともに発射された弾丸は、中堂組の構成員の急所を的確に打ち抜いていく。順々に。左から。そして、打たれた人間たちは、数秒かけてゆっくりと、呆け顔で倒れていく。

「……國山、どんまい。お前のことは忘れる」
槓が呟いた。

何事が起きたのかを俺が理解しきるころには、部屋の中には俺と槓と咲、三人しか居なかった。あとの床に転がっているものは、ただの屍、言っなれば物体である。

派手なアクションなど何一つ起こさない。ただ、咲の携帯電話が

二つに折られた瞬間に、二人は作業のように人間を殺し始めた。そのことに、俺は戦慄した。

「……まあ、こういうことだ。俺たちがやってるのは」

槇が、ゆっくりと、そんな言葉を口にする。

「これが現実だ。俺たちはプロだ。何があっても依頼は達成しなければならぬ。たとえ、人を殺しても、だ」

「……はあ」

俺は、別に人を殺した槇や咲を咎めるつもりはない。ただ、聞いておいても良いはずだ。

これからこの仕事で食っていく予定の俺には、聞く権利があるはずだ。

「どうして、こんなことができるんですか」

「芳樹君」

咲が答えようとする。

「黒さんにね、三つ、言われていることがあるんだ。私たち」

「ああ。社訓、みたいなもんか。よし、そうだな、これからお前に伝授してやろう」

極めて真剣な表情の槇は、腕を組み、声を張り上げた。

「一つ！ 死んでも依頼は達成しろ！ 一つ！ 死んでも刃物で人を傷つけるな！ そして……一つ！」

そこで、槇は一旦言葉を切り、俺の方に向き直る。

「死んでも、死ぬな」

それが一番重要なことだ。そう言わんばかりに、槇は目を瞑る。

そして、開く。咲の方も、うん、と強く頷く。

「私たちは、はっきり言って、お金のために働いているにすぎない。まあ、私は面白いからやってるってさっき言ったけど、別に人を殺すのが面白いって言うんじゃないよ？ ただ、その過程が面白いし、頑張ってる、生きてるって実感できるから、やってるんだ。それもこれも、この社訓のおかげ」

「ああ。俺は金のためだが、この社訓があるからやっていける。何

せ、社長直々に『死ぬな』って言うてくれてるんだ。……ああ、何て言えばいいのか」

「ここに、私たちの居場所があるんだよね」

「そう、だな。むしろここにしかない感じだ」

「だから私たちは働いているんだよね。どんなに危険でも」

「……ああ、違いねえ」

そう、槇と咲は言った。その話は、彼らもこれまであまり良い境遇に居たわけではないということを彷彿させた。少なくとも俺はそう感じた。

ここにしか、居場所がない。

それは、俺も同じだから。

ただ、一つ気になることがあった。

「あの」

「ん？ どうしたの、芳樹君？」

「『死んでも刃物で人を傷つけるな』って………どういうことですか？」

「ああ、それね」

咲が苦笑いして、首を捻りながらいう。

「なんか、私もよく分かってる訳じゃないんだけど、黒さん、刃物嫌いらしいの」

結局、黒の好き嫌い、気分次第でこの会社は回っている。

いつも通り。裏の世界でどれだけ顔が広かるうが、結局は「Na」だ。

「んじゃ、やるか」

槇が唐突に切り出した。

「えっ、やるって何を？」

「あんまり良くない仕事用戦闘員になれるかどうか、テストだよ！」

「組長とか撃ったからなあ。もう、下の階からわらわらと悪人面した奴らが来るだろうよ」

「ええ！？」

言われてみると、下階から続々と足音が聞こえる。聞いた限り、かなりの大人数だ。

槇と咲の銃声は

「殺されないように、がんばってね！……あーあ、私もがんばらないと。もう、本当、怖いのはイヤだなー」

「えっ、ちよっ」

「あとな」

槇が、これで終わりという体で忠告してくれた。

「人を殺すのを躊躇してたら、自分が死ぬからな。死ぬな、生きる、そのために殺せ。どうせこいつらはろくでもない人間だ。そう、割り切れ」

その言葉が終わる頃には、ボタンという音とともに、組長室入り口の扉が開いた。

「っしゃあ、行くぞ！」

第十一話 銃撃戦

眼前に迫ってくる強面の男たち。それぞれが、思い思いの銃器を抱えている。その数、目算で三十人。

「多い……けど、まあ行けんだろ」

そんなことを呟きながら、相手に先制攻撃を仕掛ける榎。一人、また一人と撃ち倒していく。

だが、さすがに数が数である。全員を一度に相手取るのは無理があると判断したのか、机の陰に飛び込み、機を窺いながら攻めと守りを切り替えるつもりのようなのだ。咲も同じようにしている。どうやら、物陰に身を隠すのはこういう場での常識のようなものらしい。

俺もあわててソファの裏に身を隠す。それと同時に、組員からの乱射が始まる。ようやく状況を認識し、応戦してきたらしい。明らかに本職である彼らを相手に、一定時間こちらが一方的に攻撃できる「間」を作り出すことができるのは、榎と咲の熟練度のなせる技なのだろう。

ガンッ！ ガンッ！

パン！

バラバラバラバララララ！

機関銃と思しき発砲音まで聞こえる。建物を破壊してしまうことなど一切歯牙にかけない容赦のなさ。あまりの掃射に、榎も咲も、当然ながら俺も身動きがとれなくなる。

「あいつら！ 頭に！ 血が昇ってんなあ！」

銃声にかき消されないように、榎が叫ぶ。

「いい、芳樹君！ こういうときは！ 弾切れの隙を狙うんだよ！」
咲も同様に大きく声を張り上げる。俺にアドバイスしてくれる余裕さえあるようだ。

「でも、あいつら多すぎますよ！ 同時に弾切れなんか起こさないんじゃない？」

「その隙を、自分で作るんだよ！」

俺の疑問に答えた槇は、拳銃に弾を込めて、一瞬だけ顔を机の陰から出し、すぐに引っ込める。

「そこや！ おんどら、食らえ！」

関西弁なのだろうか。そんなしゃべり方の、とある組員に感化され、やくざ連中が槇のいる机を狙う。

「な、何やってるんですか!？」

「うつせえ！ いいから見ろ！」

机も徐々に欠けていき、槇が身を隠せるスペースは狭くなる。最早被弾は免れないかに思えた、そのとき。

時が、止まった。

銃声が止む。相手の組員が苦い顔をし、弾倉を準備するよりも早

く――

「オラア、がら空きだ！」

槇と咲が飛び出す。俺もそれに続く。

二人の先輩は端から順に敵を撃っていく。俺もそれに習おうと、引き金を引こうとする。

――あれ、そういうば俺、銃を使うの、初めてじゃ――ズガンッ！

手首に衝撃が伝わる。それがそのまま肩に伝わる。

弾丸は明後日の方向に飛んでいく。照準はしたつもりだったのに、腕が弾丸を放つ際の衝撃によって、あらぬ向きを向いていた。

そして、俺の右肩は。

「ぐうつ……！」

外れた。

脱臼である。

「馬鹿！ 何やってんの！」

「ぐつ……すいません咲さん！ 大丈夫ですんで！」

俺はすぐさま、外れた肩に意識を集中する。上腕を無理矢理動かし、肩にはめようとする。もちろん、念力で。

ぎりぎりと言が痛む。それに耐えながら、少しずつ力を強めていく。すると突然、バキツという音とともに肩がはまる。

「いっつつつ……てええええ！」

はまった肩にさらに意識を持つていき、痛みを消そうとする。患部を、魔法のベールで包んでいくように。間接の間の炎症を冷やすように。

ようやく、痛みが収まった頃には。

「……遅えよ」

組員は全員、床に倒れていた。

「……す、すみません」

何もしていないのに、俺の肉体的疲労はメーターを振り切った。

組長室から、何人もの男たちの屍を越えて出る。階段を降りて行くと、残党がまだ数名居た。

「ここ、何人入ってんですかね……」

「安心しろ。さすがにこいつらで終わりだろう」

相対した瞬間、槇は躊躇なく引き金を引く。咲も無言で撃つていく。そういえば、普段と比べると咲は無口だ。

「瀧澤さん」

「何？」

「なんか、いつもと違って無口っすね」

「……それは、人を殺すのにへらへらしてられるほど、私も悪人じゃないからね。やっぱ、仕事の時は口数減るよ。説明とかもだいたい槇君に任せっぱなしだし」

応戦しながらこれだけの会話ができるとなると、俺も咲もかなり感覚が麻痺してきているようだ。いや、咲はもうすでに最初からそうだったのかもしれないが、少なくとも俺はこの小一時間の間に変わってきている。

感覚が麻痺しているというよりは、この雰囲気に対応してきている？

「まあ、槇君だって好きで人殺ししている訳じゃあないと思うけどね。私は少なくとも、苦手かな、この手の仕事は」

「でも、面白いつて言つてませんでしたか？」

はあ、とため息をつきながらも、咲は引き金を引く手を止めない。ちなみに俺は先程の失敗から学習し、取りあえず待機している。素人がみだりに銃を使うものではない。

「依頼を解決するのが、私が面白いと感じるところなの。依頼主さんの役に立ててるし、黒さんや霊華さん、槇君の役に立ててる。お金も入る……つて、これは槇君の専売特許だつて。とにかく、私はそのプロセスよりも結果が好きなの……っ！」

最後の一発で最後の一人を倒し、一息つく咲。

「ま、芳樹君も、頑張つてね！ 帰ったら、銃の撃ち方教えてあげるね」

「う……そ、そうですね」

この仕事を続けていく上では、必須になってくる技能なのだ。教えてもらつて損はないはずだ、が、やはり少し躊躇つてしまう。そもそも、銃刀法違反……というか殺人までしているというのは、やはり冷静に考えると大変な犯罪である。それでも、ここでやっつくしか俺にはないのだが。

そんなことを漠然と考えていると、突然槇が声を上げた。

「どけえ！ 芳樹い！！」

ズガン！！

次の瞬間。

俺は槇に突き飛ばされ、一緒に床になだれ込む。何が起つたの

か理解できず、少し首を左に傾けると、床には弾痕がぽっかり。そこから、白煙があがっている。

「チツ……」

「國山！？ 確かにさっき、撃った……」

先程まで俺が立っていた位置から数メートル後ろ。その位置に立っていたのは、金髪。ホスト風の容姿。紛れもない、國山だった。

「やっぱり、ダメですよ、こんな組じゃあ。あなた方には、勝てない……」

そんなことを呟きながら、俺たちの方へさらに、ゆらり、ゆらりと近づいてくる。

ゆらり、ゆらりと。

体を左右に揺らしながら。

「ええ、そんなことは分かりきっていましたが……あの段階、中堂があなた方の要求を呑まなかった段階で、私と組との決別は確たるものとなりました……。そして今は、新しい、別な目的を見つけましたよ」

國山が、銃に弾を込める。明らかな攻撃準備行動。

それなのに――

「む、向日さん！ 瀧澤さん……！」

「無駄ですよ……止めましたから」

國山は、じろりと俺の方を見る。

「さあ……存分に、楽しませてくださいよ！ なんせあなたは……」
「にやあ、という表現がぴったり合うような表情。口を三日月型にし、目は獲物である俺を見据えていて、全く笑っていない。口だけの笑い。」

そして、最後通告のようにその言葉を放つ。

「私と、同じ……魔法を扱う人種なのですからね！」

第十二話 魔法戦

「俺と……同じ……!?」

「ええ、そうです。あなたと同じ、魔法の力を持つ者。そして……あなたを捕まえることで私はもつと上へ行ける！ より強い力、より強大な魔法を使えるようになる！」

予想外の事態。

驚愕、そして混乱。脳内がぐるぐるとかき乱される。

そして気づく最悪の状況。

殺し合いにおいて全くの素人である俺にとって、唯一の國山に勝てる可能性、アドバンテージが失われた。魔法、という切り札が。國山は銃に弾を込め終え、カチャッと音を立ててその凶器を俺の方へ向ける。

「おい……どうして……俺が、魔法を使えると分かった？」

「見ていましたからね。あなたが、魔法で自分の肩を治すところを。あのとき既に私は止血を終え、肉体の再生を始めていましたからね……さあ、会話は終わりです。存分に、味わわせてくださいよ！」

國山の指が、引き金を引く。

銃弾が音速で放たれる——ことすら、知覚できないまま。

「く……あぁっ!?」

避けようとしたものの、左腕に着弾する。血が吹き出す、かに思えたが。

一滴も、血は出ない。どころか、痛みすらない。

これは何だ、と思った瞬間。

ピキキキ……!

「これは……!?」

「アイシクル。私の魔法を込めた弾丸……魔弾による凍結効果です」俺の左腕が、猛スピードで氷に覆われていく。徐々に感覚が麻痺していく。

「くっ、そ！」

左腕に神経を集中する。ただひたすら、燃えろと願い、祈り、左腕に火炎を発生させる。いつもライター代わりに使っていた魔法の効果範囲と威力を変えただけの魔法だ。途端に、ジュー、という音がして氷が溶けていく。

それだけで、俺にとってはかなりの重労働だ。

「はあ、はあ……」

「やれやれ、予想していたとはいえ実に興味深い。魔道具も儀式もなしでそこまでの力が使えるとは……末恐ろしいですね。ですが、それほどに疲れがたまる技、乱発は不可能でしょう!？」

ガンッ！ ガンッ！

國山が立て続けに「アイシクル」を撃つ。周囲の壁やら床やらが凍り付いていく。俺は何とか物陰に隠れてやり過ごすが――

「いいんですか！ こっちには向日様も滝沢様も取り残されているんですよ！」

「くっ！」

――人質をとられていては、出ていくほかはない。そう、二人は國山の使った何らかの魔法で倒れたままだ。俺は、外れた肩の治癒と発火による腕の解凍、二度の魔法使用で疲労困憊の体を引きずり、國山の攻撃範囲に入る。

「うおお！」

右腕を突き出して國山を狙う。絶対死の魔法。「シネ」という言葉で、脳内を満たす。俺の魔法に特別な儀式は不要だ。ただ、願い、祈ればいい。

右腕から、見えない、けれどどす黒いことが分かるオーラが國山の方に向かって伸びていく。それは人の手、いや、悪魔の手の形に変化して國山の首をつかむ。

だが。

「無駄ですよ……そんな強度の低い魔法で死ぬのは一般人くらいです。魔法使いたる私には効かない！」

國山は銃を自分の首に向けて発砲する。第三者が見れば自殺行為だが、黒い悪魔の手の存在が感じられる俺、國山からするとそうではない。氷の力をまとった銃弾は悪魔の手に突き刺さり、それを凍てつかせる。それにより、悪魔の手は即座に力を失う。

國山は、平然とした様子で言葉を並べた。

「残念でしたね、あと一步のところで。あなたはもう終わりです」
「誰がッ……。うつ!?」

「……あの魔法は、生身のあなたには重すぎますよね」

俺の口から、赤くてどろりとしたものが一気に飛び出る。

喀血。初めてその言葉を実感する。体感する。

……。ああ、これが血か。

血と共に、全身から力が抜けていく感覚が俺を襲う。苦しさに吞まれる。

もう、だめだ。動けない。動かせない。指一本でさえ。

「ごほっ！ ごほっ！」

「フッ……魔道具なしで魔法を使うことのリスクも、魔道具が何なのかも、そもそも魔法が何なのかすら、知らないのでしょうね、あなたは。ですがそれで良いのですよ。ただあなたは私に捕獲され、国際魔法機関への手みやげになってくれればね」

國山が、血を吐いて倒れた俺に銃を向ける。あの銃にはさっきと同じ、「アイシクル」が入っているのだろう。

もう、動けない。弾丸を避けるのは無理だ。おそらくこのままだと、俺は死んでしまう。……。いや、國山に捕らえられ、「国際魔法機関」とやらへ送られてしまうのだろう。

それなら、いっそ――！

「う、おおっ！」

全身から炎を吹き出す。死力を尽くして。周囲のすべてを焼き払うように。俺の体が、そのまま燃え尽きてしまってもいいというくらいに。

「クッ!? まだ、そんな力が！」

とつさに後方へ跳ぶ國山。それでも俺は炎を止めない。命を燃やすように、ただ周囲を焼きつくす。壁も、床も、高級そうなソファも。中堂組事務所ごと、すべてを燃え上がらせようとするかのよう

に。
「ぐっ！ ああっ！ ああああ！ ……ごほっ！」

また、血を吐く。やはりこれだけ広域の魔法となると体への負担も絶大なようだ。

もう、本当の本当に限界だ。

そう、思ったとき。

「……もう、いいよ」

何者かが俺の肩をたたく。誰だ。國山か。なら、もっと火を強く大きく――

「ぐ……ううあああああああ！」

「もういいつつてんだろ！」

頭を拳で殴られる。おかしい。今、俺の周りは火の海のはずなのに。この、声は。

そこには、体の至る所を火傷した槇と咲が立っていた。
驚いて、火を止める。

「む……こうさん……たきさわさ、ん……どうして……」

俺の問いに、まだ体から煙を上げる槇と咲が笑みを浮かべる。

「なんか、凍り付いてたみたいだ、俺たち。國山がなんかした、みたいだな……」

「でもね、芳樹君の炎、暖かったよ。ありがとね」

「二人とも……」

思わず、目にしよっぱい液体が溜まる。だが、俺も大人なのだ。絶対にそのしよっぱい液体を、流して溜まるものか。

「ここからは、まあ、任せとけ。さっきみたいなヘマはしねえ。ずっと凍って動かない体の中で見てたからな、おまえの戦い」

「うん。すごかったよ。後で祝勝会と芳樹君のがんばり祝いしなきゃね」

「は……はい……はい……」

「おいおいおい、まだこれからだぞ、戦いはな」

「うん、そだね。じゃあ取りあえず、状況を整理しないと」

咲が笑顔から真顔になる。

「あの人に見られたら、私たちは凍っちゃう。あれも魔法なのかな。ただ、芳樹君はあの人に見られても凍らない。理由は分からない。そしてあの人が撃った弾に触るとそこが凍り付く、と」

「そうだな。だから、いかに裏をとりながら、そして早くあいつをしとめるのが重要、ってこった。てなわけで、お前は寝てろ」

槇が俺に言う。だが、その言葉には納得がいかない。

「お……俺、まだ、やれます……。相手は、魔法を、使ってくるから……俺がやらないと……」

しかしそんな俺を槇がたしなめた。

「何言ってるんだ。死にかけてやがんじゃないか。お前、この仕事続けていくんだろ？　だったら、体は資本だ、大切にしろ」

二人は俺の前に立つ。それこそ、見た目には俺よりもぼろぼろの体で。

すると、俺が魔法で出した炎により上がった煙の向こう側から、國山が姿を現す。

「末期の挨拶はすみしましたか？　向日様」

「ああ。末期じゃあねえけどな。なんせ、ここで死ぬのは……お前だけだからな！」

「やるよ、槇君！」

「おお！」

「フン、一般人風情が……！　魔法の恐ろしさ、思い知らせてあげましょう！」

第十三話 顛末、それから

「うつ……く……」

何とか首だけを動かして、槇、咲と國山の方を見やる。

「ハハハハッ！ どうしました、『NaN』の人間の力はそんなものですか！ もっと楽しませてくださいよ！」

次々に氷弾を放つ國山。心なしか周囲の気温も下がってきている。今まで壁に隠れてやり過ごしていた槇と咲が行動に出た。氷弾が連射される中へ、槇が突撃する。咲が後から援護する。

無茶だ、避けられるはずがない。

「おらああああ！」

槇が叫び声をあげる。

國山は冷静に槇を照準し指先に力を込めようとした。しかし——
パンッ！

「ぐっ、何ッ!?」

「……」

咲が國山の手元を正確に撃ち抜いた。指先からボトボトと血を流す國山。攻撃が、止まる。

槇はその隙に國山に接近した。

「食らえやつ！」

至近距離からのヘッドショット。

破裂。

炸裂。

國山の首が、一気に後ろへのけぞる。……やったか？

だが、現実には甘くはない。甘くしてはくれない。

「クックックッ……」

首を後ろに折ったまま、國山が笑い声を漏らす。まだ生きていることに気がついた槇が、立て続けに体を撃ち抜く。

ガンッ！ ガンッ！ ガンッ！ カチッ……カチッ……。

「チイっ、弾切れか！」

「効きませんよ効きませんよ効きませんよ！ その程度の衝撃じゃあね！ クハッ……ハッハッハッ！ ……ハア、ハア！」

肩で息をしながら、それでも國山は笑う。

「魔道具なしでも、魔法は使えます……もちろん、体力はかなり持って行かれますがね。そこに転がっている、彼のように、ね！」

國山は、額に脂汗を浮かべながらそう言った。

槓は銃を捨て、素手で國山に襲いかかる。國山も素手で殴る。骨と肉がぶつかり合う音が、組事務所に響く。

すると、國山がまた魔法を使って槓の拳を凍り付かせた。

「うっ……」

「ハア、ハア……くらえっ！」

拳を封じられた槓を、國山が殴りとばす。顎への強烈な一撃。意識さえ飛ばなかったようだ。が、槓の体はそのまま放物線を描く。

魔法を使った影響で國山の方もただではすまないのか、目に見えて動きが遅くなっている。だが、このままでは槓の勝算は低い。

くそ、俺が立てれば。立って、あれを拾うことができれば……。

そう思った矢先。

先ほどまで援護射撃をしていた咲が、こちらに向かって歩いてきた。さすがにあの殴り合いの中で國山だけを撃ち抜くのは無理だったのだろうか。なるべく國山の注意をこちらに向けないように、音を立てず、ゆっくりと、近寄ってきた。

「瀧澤、さん……」

「分かってる。何も言わないでいい」

咲は、それを拾って俺に手渡す。

「これでいいよね」

「はい……ありがとうございます」

「いい？ 三人で生きて帰るために、私はこれを君に渡す。君が持っているべきものだから。君が使うべきものだから。だから……無理は、しないで」

「分かってます」

咲が俺に手を伸ばす。俺はそれを握る。

体を引き起こしてもらい、ふらつく足でなんとか立ち上がる。

「……いくよ」

「ええ」

咲が息を吸い込む。

そして、声を張り上げた。

「槇君！ 離脱！」

その声を聞いた槇が、思い切り國山の体を蹴りとばし、三角跳びの要領で自分は後退した。

國山のガードがから空きになる。

その瞬間。

咲が、発砲を開始する。

打って、打って、打ちまくる。ただひたすら。

そう表現するにふさわしい行い。作戦も何もない、ただの悪あがきのような連射。

「効かないと……言っているでしょうが！」

國山も同じように受け取ったのか、余裕を見せる。体に絶対零度の氷の層を纏い、弾丸の雨を防ぎきる。

「今よ、芳樹君！」

咲の合図。

「うつ……おおおおおおお！」

俺は、國山の持っていた銃の引き金を引き絞った。
爆ぜろ、という念とともに。

爆音。

着弾。

発火。

いや、爆発。

國山の叫び声がこだまする。苦しみに喘ぐ声。

「グッ……アアアッ！　なぜだ！　なぜだあああ！」

「おい、それ」

槇が俺に呼びかける。國山に殴られたせいで、酷い顔だ。

「はい。瀧澤さんが、拾ってくれました。あいつの銃です」

「でもそれ、氷のヤツじゃ……」

「わかんないですけど……俺が使うと、爆発しましたね」

計画性も何もない、怪しい鉄砲に頼った無鉄砲な作戦。作戦とすら呼べないだろうか。

しかし、これしか方法がなかったのも確かだ。

「あいつには、ふつうの銃は効かない。あいつのスタミナが尽きるか、こっちの弾が尽きるか。槇君は見たところ弾切れだし、私もあと四発しか残ってない。勝てる見込みはなかったからね……あとは芳樹君の力に賭けるしかなかったの」

「かといって、芳樹はもうふつうには魔法使えねえし、じゃああの怪しげな銃を使うしかねえ、ってことか……なんつー無茶を」

槇は呆れたように笑った。

気付けば、國山の叫び声は聞こえなくなっており、ただ焦げ臭いにおいだけが辺りに充満していた。

俺たちは、その炎に巻き込まれないように、急いで退散した。

依頼人、時坂組。

依頼内容、中堂組の宍島市内への進入の停止。

報酬、出来高払い。

依頼、達成。

「結局、あいつの言ってたことはよく分からないことばっかだったな……」

あの後。「NaN」の事務所へ到着してから、霊歌が傷の手当を

してくれた。霊歌曰く、「全くもう、怪我なんかしないでよね。薬代とかも馬鹿にならないし、それに死なれてもいろいろ困るんだから……まあ働いてもらわないとそれはそれで困るんだけど、でもね」云々。要するに、いつもの指導癖だ。

ひと段落してから、槇が唐突に口を開き、そして件の言葉である。

「国際魔法機関、でしたっけ」

「そうそう。言ってたよねー、なんかそんなの」

咲の変貌に思わず背筋が凍る。戦場で見たあの顔は真剣そのものだったが、今の彼女はいつも通りだ。切り替えが早いというか、何というか。

「芳樹君を手みやげにすれば、もっと強くなれるみたいなことだっけ……」

「そうそう。それだ。ありやどどういう意味だ？」

槇が疑問を投げかけるも、誰も答えられない。当然だ。

「何話してるのかしら」

そこへ、指導癖の持ち主・霊歌が話へ割り込んできた。いや、今はその指導癖も発動してないのだが。

「じつはかくかくしかじからんらんらんで……」

「らんらんらんって何だよ」

「そこはやっぱラン・ンルーの方があってるんじゃないですか？」

「『ラン・ンルーって、何なんだ？』みたいなCMあったよな」

「ああ、あったねー。なつかしー」

「ごめん、話が全く見えてこない」

かくかくしかじかラン・ンルーでは話の内容が伝わるはずもなく、霊歌一人が置いてけぼりにされたまま会話が続いていく。

「もしかして、聞いちゃいけないこと？」

「ああ、そういうことじゃないですよ。単に面白がってただけって言うか……」

「面白がってたの？」

霊歌がニツコリと笑う。もちろん、黒い方の笑いだ。

俺、槓、咲が凍り付く。さながら「アイシクル」で撃たれたかのように。

ちなみに國山の銃は今も俺の懐に入っている。形見として持っているのではなく、あくまで使えそうだからという理由だが。

「まあ、いいわ。後でじっくり聞かせてもらってから……それよりも、吉川君に言つとかないとね」

「え、俺ですか？」

何だろう。また何か、靈歌の逆鱗に触れるようなことをしてしまったのだろうか。

しかし、靈歌が口にしたのは予想を裏切る言葉だった。

「おめでとう、吉川君。晴れて正社員……じゃない、裏社員ね！」

「おーそうだったそうだった、おめでとう芳樹君！」

「おめでとうな、芳樹！」

それは、祝福の言葉だった。

知らない内に裏社員になってしまっていた。

「あれ、そう言えば社長は？」

「ああ、黒さんなら……」

靈歌がそう言いかけたとき、ガチャツ、と玄関のドアが開いた。それに反応し、靈歌は玄関へ向かう。

「仕事中、だっただけど、帰ってきたみたい、ね……！？」

「どうしたんですか、幸崎さん？」

靈歌のただならぬ様子に違和感を覚え、俺も玄関へと足を進めた。

「う……」

「黒さん！？ 大丈夫ですか！？」

そこには、ぼろぼろの状態で横たわる黒がいた。体からは、腐食したようなきつい臭いがする。

「社長！」

「ああ……お前か……気をつける、お前……何か知らんが、変なの
に、ねらわれて……」

「吉川君！ とりあえず奥まで運ぶよ！」

「は、はい！」

俺と霊歌は、黒を奥の部屋のソファまで運んだ。

第十四話 責任

「社長、どうでした……？」

俺と霊歌が黒を運び終えて、槇と咲のいる部屋に戻ると、すかさず咲が霊歌にそう尋ねた。

「とりあえず、命に別状はなさそうね」

「そうか……よかった」

「ひとまず安心だね」

ふう、とため息をついて槇と咲が崩れ落ちる。どうやらかなり心配していたらしい。

「でもね」

霊歌が神妙な表情で切り出す。その声音に、また部屋の空気が緊張した。

「様子がおかしいの」

「様子がおかしいって、具体的にはどういう……」

咲に聞かれたので俺が霊歌の後を引き継いだ。

「……あまり驚かないください。それだけ先に言っておきます」
「さながら小説ページトップの「残酷描写」のように警告をしてから言っ」

「社長の体の一部が……おそらく、壊死しています」

「！？」

やはり驚いた。いや、当然だろう。無理もない。つい数時間前まで元気だった人間の体が、壊死——細胞の一部が死んでいる、というのだから。

俺には医学的な知識はない。だからすべて幸崎が診断したとおりの内容を並べただけだ。だがそれは、医師が患者の親族に病名を告げる宣告のような状況だった。

それほどまでに、咲や槇、また霊歌と、黒の絆が深く厚いものであるということなのだろう。今はそれを喜んでいる余裕はない。

「どうしてそんなことになってんだ？」

「原因は不明よ。本当に、何もわからない」

「わからないって、そんな……！」

「落ち着いてください、瀧澤さん！ 気持ちは本当に、つらい程良くわかりますけど、今は取り乱している時じゃ……」

興奮状態に陥りかけた咲をなんとかなだめる。

「……そうだね、ごめん。私、先輩なのにね……」

「いえ……」

「とにかく」

槇が霊歌に向き直る。

「いろいろ状況を確認しときたい。幸崎、社長は何の仕事をしていたんだ？」

そう言えば、槇は霊歌を苗字呼び捨てし、槇と咲は名前で呼び合うのに、咲は霊歌に敬語を使う。変わった関係だが、何か理由があるのだろうか。

……関係ないことばかり考えてしまう。頭がぼんやりしている。だめだ、非常時になって混乱しているのかもしれない。

そんな俺の思考を断ち切るように、霊歌が槇の要求に応え、状況を話し始めた。

「そうね……まずは、依頼人からかな……」

霊歌はなぜか、俺の方をちらりと見た。

今日黒さんが請け負っていた仕事の依頼人は、……吉川芳樹、「NaN」の社員。吉川君よ。

依頼内容は、連日の嫌がらせを止めること。

具体的な方策として社長が言っていたのは、嫌がらせの主を捕まえてやめさせるという実行使。現場を押さえるのが一番だからって、昼間にはもう吉川君の家の前で待機していたみたいね。

それで、ずっと見張っていた……んだと思う。黒さんがここを出るまでのことしか知らないから、正確なことはいえないけどね。

「……」

「吉川君、言っておくけれど、あなたのせいじゃないわよ。……つて言っても、たぶん立ち直れない、わよね……」

俺の心理を先読みしたように霊歌が言葉をかけてくれた。優しい言葉だけに、俺はますます自己嫌悪に駆られた。

また俺がらみのことで、会社みんなが傷つくのか。黒が傷つくのか。

霊歌は俺のせいではないと言ってくれたが、それでも、自責の念は拭えない。

「今日はもう上がりなさい、吉川君」

「えっ」

黙ったままで子供のような対応をしてしまった俺に、霊歌がそう言ってくれた。

「いい？ 頭を冷やすこと。そしたらまた、仕事を回すから」

「そうだぜ、芳樹」

「今日は裏の仕事も初めてやって、ぼろぼろだし疲れてるだろうし言われてみればそうだ。気付いてしまっただけではもう遅い、俺の体を猛烈な疲労感がおそった。まるで魔法をたくさん使ってしまった後のように。」

……魔法？

「まさか……」

「どうしたの、芳樹君？」

咲が心配そうな声を出す、俺の耳には入っていない。

思考が加速する。

家の玄関扉に張り付いていた、腐食した謎の物体。國山の存在と、「国際魔法機関への手みやげになる」という言葉。黒の体の部分的な壊死。そして、黒が言っていた「お前はねらわれている」という言葉。

カチリ、カチリと断片的だったピースがつながっていく。

「……すみません、みなさん。やっぱり、これは俺の責任です」

「……ッ。だから、違うつて言つて……！」

「いえ。本当に、俺の責任なんです！　だつて、相手はたぶん……俺をねらつてきている、魔法使い、ですから」

全員の表情が固まる。それから、槇と咲だけが、あつ、という表情に変わる。

「そうか、國山と同じで……」

「それなら社長の体の不自然な壊死、説明がつくね……」

「ちよつとちよつと、私だけ置いてけぼりにしないでくれる？」

焦つたような声で、靈歌が言つた。

「まだ説明してませんでしたね、國山のこと」

「國山つて、今さっきの仕事相手の中堂組の幹部よね？　その人がどうかしたの？」

なんと、そこまで把握しているのか。なら話は早い。

「あいつも魔法使いでした。そして、俺を捕まえようとしていました」

「えっ!？」

靈歌は、さすがに戸惑いを隠せないのか、それが思い切り顔に出ている。

「俺たちはそいつを倒すのに、殺すのに手間取つて、こんなにぼろぼろになったんですが……やはり、また今回も、俺をねらつた魔法使いの仕業かもしれないです」

「まあ、本当に可能性の一つでしかないけど……それならいろんな矛盾がなくなるのも確かです、靈歌さん」

「……そうなの？」

「ああ、そうだな」

槇が力強くうなづく。

「だから、この件は俺に解決させてください。俺に、この件に関する仕事を回してください。お願いします」

「……」

俺が言つと、霊歌はしばらく考え込むような仕草を見せた。そして。

「……わかったわ。じゃあ、吉川君に任せる」

「はい」

「ただし！」

と、霊歌が注釈を付け加える。

「一人で危険なことに首を突っ込まないこと。そして、今度の黒さんがやられたこと以外の仕事も、ちゃんとこなすこと。それが、条件。いいわね？」

いつもの指導癖、だろうか。いや、そこには明確な「吉川芳樹を心配する心」が現れていたように思う。もちろん、俺の勘違いかもしれないが。

俺はそれに、首肯で答えた。

第十五話 夜の襲撃

俺は帰路についた。「仕事と犯人探しは明日からだ。今日のところはさっさと帰れ」と槇に促された故に、俺は今自宅へ向かっているのだが。

考えてみれば黒が襲撃されたのは俺の自宅の玄関前あるいはその周辺な訳で、本当に大丈夫なものかと少々心配だった。まあ、それならそれで、勝手に一人で責任をとらせてもらっただけだ。要するに、相手の魔法使いを俺の力でねじふせ、殺す。

殺すことに、もう躊躇いはない。今日の一件だけで、俺は何人の人を殺しただろうか。そして、その中で、何人の顔を覚えているだろうか。……正直、印象的な國山の金髪ホスト顔以外は、頭に残っていない。

槇の言っていたとおりだ。殺されそうになる前に、殺すしかない。俺は今日という日だけで、それを嫌と言うほど実感してしまった。

また、周りの人たち——事務所の面々を守るにも、俺は俺と同じ人種を殺さなければいけない、ということも。黒があればだけの重傷を負ったのは、やはり俺のせいだ。もう、あんな悲劇は起こしたくない。

一人になると、改めて考えてしまう。

俺のバケモノの力が、周囲に不幸をもたらしているのではないかと。

黒は言ってくれた。俺はバケモノでないと、断言してくれた。だが、それでもやはり俺はおかしいのだ。狂っているのだ。そして、本来なら俺が一人で狂っていればいいものを、「NaN」の面々まで巻き込んでしまっている。

主観的に見ても、客観的に見ても、楽観的に見ても、悲観的に見ても。

俺のせいで周りが不幸になっているという答えしか、どうしても

見つけ出せない。

ならばいつそ、黒をあんな風にした憎き魔法使いとともに、心中でもしてやろうか――

そんな危険なことを考えているうちに、気付けば俺は自宅の前まで到着していた。

反射的に、扉に異物が付着していないかを確認する。

「……異常ナシ、っと」

あんなことがあった後に、逆に何もおかしいところがないというのは、返って不自然にも感じられた。俺の意識過剰だろうか。

俺はドアノブに手をかけ、それを引く。部屋の中は真っ暗で誰もいない。だが、明かりのスイッチを押すと、主の帰りを待っていたかのように部屋は暖かく感じられた。

「なんか……すげえ懐かしいな……」

そんな独り言を漏らしつつ、迷わずベッドに直行し横になる。風呂にも入りたいし服も着替えたいが、それに疲労が勝った。

本当に、いろいろなことが一度に起こった一日だった。

最初に受けた依頼――今思えば、実に簡単に軽く感じられる依頼は、失敗に終わった。それに一人で勝手に落ち込んだ。それを見かねた黒に、裏の仕事をやってこいと言われ、槇と咲とともに銃撃戦を生き抜き、國山と魔法での本気の殺し合いをし、そしてすべてが解決したかに思われた頃、黒が重傷を負って帰ってきた……。

そのすべての事柄に対する疲れが、俺を眠りの世界へと誘う。俺はそのまま、意識を失った。

玄関の鍵を開けたままという、無警戒にも程がある状態で。

ひたひたと、足音が近づいてくる。

ひた、ひた。

ひた、ひた、ひた。

ひた、ひた……。

止まった。

足音の主は、手にグローブをはめる。そしてその手を構え、ゆっくりと俺をねらう。

まずい。動けば、気付かれる。だが、動かなければやられる。どうするべきか。

幸い、相手は武器を持っていない。グローブをはめているだけの丸腰だ。だが、……相手が魔法を使う人間だとすると、もうすでに死ぬ一歩手前だ。

グローブをはめた手が徐々に俺に近づいてくる。もう、逃げるなら——あるいは、闘るなら、今しかない。

俺は布団を勢いよく押し上げて、相手の顔にかぶせた。

「うわっぶ！」

そんな声を上げる相手から逃れるために、一気にベッドから転がり出る。

「くそっ！ なにしゃあんでい！」

威勢のよい江戸っ子口調だが、明らかに使い慣れていない感じ。

その上、くぐもった声は高い。女だろうか。

いや、頭に布団をかぶっていてこの身長、どうやら子供らしい。

もちろん、少女という線も残っているが。

たとえこの相手が子供だったにせよ、危険な人物であることには変わらない。俺は反射的に机の引き出しを開けて、國山の銃を取り出した。あいつとやり合った時と同じように使えるかどうか不安だが、今はそんなことを考慮している場合ではない。銃を容赦なく子供の方へ向けた。

動くな、と発声しようとしたが、突然の腐食臭が俺を襲う。見ると、俺の布団がじわじわと溶けて、否、腐っていつている。

顔をしかめ、鼻を塞ぎながらなりゆきを見守っていると、とうとう布団が腐りきって床に落ちた。

「うー、邪魔つけ邪魔つけ。何してくれてんのさ」

予想通り、子供だった。両手にグローブをしており、見た目の年齢は一三歳くらいだろうか。性別は……男っぽい服装だが、童顔で、

まだ判断が付かない。

「動くな！」

今度こそ、ちゃんと言う。いきなり子供を撃つような趣味はないが、相手はおそらく魔法を使って俺の布団を腐らせたのだろう。ならば警戒するしかない。引き金に指をかけて、子供に銃を向けた。

「動けば撃つぞ」

そう脅すと、子供は素直にぴたりと動きを止めた。

「……なんで魔道具持ってたの……前情報じゃ、装備ナシの超能力者だって聞いてたのになあ。これは分が悪いなあ、うん、分が悪い」
動きは止まったものの、口は止まらない。つらつらと言葉を並べる。このまま放っておけば、いろいろ聞けるかもしれない。俺の知らない魔法の裏側や、あんなことこんなことまで。

「くっそー、一番乗りだと思ったのになあ。もつとちゃくくない武器ほしいからがんばってたのに。あーあ、ライセンスもクラスアップするかと思ったけど、うまく行かないもんだね」

……本当に、いろいろ喋ってくれる。このまま三時間くらい放置しておいても問題ないのではないだろうか。

「お兄さん、それいいね。どこで拾ったの？ 見たところ氷向けにいじってあるみたいだけど、もしかして金髪ヤクザから奪ったのかな？ だとしたらすごいねえ、あの人たしか銅でしょ？ 僕まだ緑だし、敵う気がしないなあ。あのヤクザにも、お兄さんにもね。まあお兄さんはライセンスのないモグリだけど」

なんだか、物語の序盤ではまだ聞いてはいけないことを聞いているような気になる。ネタバレはほどほどにしないと、いろいろマズいのではないだろうか……。

俺はそんな的外れな不安を抱きながら、さらに目の前の子供に近寄り、額に銃を押しつけた。絵面的に犯罪性が強くなる。

「おい、とりあえずそのグローブ外せ。子供には過ぎた玩具だろ？」
おそらくこのグローブが、國山やこの子供の言うところの「魔道具」。これを奪えば、無力化まではいかないにしても（國山の時の

ように力押しで魔法を発動されるおそれもある）、脅威が小さくなることは間違いないだろう。

「へーいへい。分かったよ、外す外す。じゃあいくよ……」

不意の違和感。なぜ、グローブを外すだけでそんなに溜をつくる？

「いち、にーの……」

「お、おい、やっぱストップ」

「さーん！」

子供が、グローブを外す——のではなく、頭に突きつけられた銃を握る。俺が引き金を引くよりも早く、ジュウウ、という音とともに、おそらくふつうの鉄や鉛ではないだろう銃身が溶け出す。

「ほい、一丁上がり！ あ、拳銃だから本当に一丁！」

そんな言葉を発しながら、にこにこ無邪気に子供は笑う。さらに、笑いながら——グローブをはめた手を銃から離して、俺に向けた。

「じゃあ、次はお兄さんだね！」

子供の目が凶悪に光る。グローブが俺の顔を掴もうとした刹那。全身に、力を込める。

さてどんな魔法を使おうか、などと考えている暇も当然ない。

とりあえず——吹っ飛べ！

物理法則を「ルールなんてまっぴらごめんだぜ」という感じで完全に無視した力が働き、子供の体を吹き飛ばす。そのまま水平方向にあり得ない動きをして、俺の家の壁にぶち当たる。子供の体と壁が、めきめきと音を立てる。作用と反作用に押しつぶされながら、子供は息をかつと吐いた。

これは、やばい。たぶんだが、非常にやばい。

やりすぎた。

「……」

「お、おーい、大丈夫か？」

ぜえぜえと肩で息をしながら、子供に問いかける。いや、こいつは俺を捕まえにきた、もしくは殺しにきたということは分かっている。

る。分かっているが、さすがに死なれては困る。何せ、ふつうではないにしろ、子供は子供だ。

「……痛いよー」

子供は無表情でそう言った。よかった、意識はあるようだ。

「す、すまんやりすぎた」

「……いや、しょうがないっしょ。僕はお兄ちゃんを倒そうとしてたんだから、お兄ちゃんが僕を倒そうとやり返すのはむしろ当然だよな。ていうかさすがだねお兄ちゃん。まさかあの銃なしでここまでの力が使えるなんて。それ以上に、ここまでの力を使ってそれだけのエネルギー使用で済んでるなんて。お兄ちゃんは才能の塊だなあ、嫉妬しちゃうよ嫉妬」

あれだけ体からめきめきと音を立てていたにしては、元気すぎやしないだろうか。

「……そんだけ饒舌なら大丈夫そうだな。いろいろ、聞かせてもらうぞ。どうしてお前が俺をねらうのかとか、いろいろ、な」

俺はひとまず子供からグローブを奪い、両手を後ろ手に縛って、話を聞くことにした。

第十六話 大捕り物

「教える。どうしてお前は俺を攻撃してきた？」

「えー、ヤダ。体痛いし。肋骨何本かやっちゃってると思うし。それもお兄ちゃんの子のせいだし」

「それもこれもお前が俺の寝込みをおそってきたからだろぅが……だいたい、肋骨はさっき治してやっただろうが」

「お兄ちゃんの魔法は便利だねー、何でもできて」

ベッドに座っている俺と、後ろ手に縛られながら床に正座している子供。誘拐犯に間違われてもおかしくない状況だが、子供を完全に無力化したわけではない以上、こうして自由を奪っておかねばならない。

ひとまずは尋問、ということで、このような「誰かに見つければ絶対に言い訳のできない状況」になっている。

「さあ、早く教えるよ」

「……分かったよ。教えればいいんでしょ？ 面倒くさいなあ」

もう一度吹き飛ばしてやろうかと思った。だが、もうそんなことに使える体力は残っていない。疲労だけでなく、エネルギーを消費したことによる空腹感が俺をぐらくらとさせた。

「ただし、交換条件ね」

子供がふてぶてしく言う。

「いい加減殴るぞ？」

「いいけど、殴っても交換条件は出すよ？」

殴らなかった。が、こめかみを両側からぐりぐりとしてやった。

「えいだだだだだ」

「おい、一応聞いてやるよ、その交換条件とやらをな。いったい俺は何をすればいい？ 何を望む？」

「と、とりあえずその手を止めてくれないかなあだだだだだ」

手を離してやると、涙目でこちらを睨んできた。やっぱりこいつ、

子供だ。危険生物であることに変わりはないが。

「じゃあ言うよ」

「さっさとしろ、さっさと」

そう促すと、子供はうんうんとうなりながら、やっこのこと言葉をはねりだした。ただ、その言葉がいろいろおかしかった。

「……お兄ちゃんのミラクルすぎるマジカルパワーを、貸してください」

「ごめん何言ってるかわかんない」

ミラクルすぎるマジカルパワーって何だ。俺はどここの魔法少女だ。ていうか今の、完全にふざけて口走ったことだろ。

子供はまだ痛そうにこめかみをさすりながら、口を開いた。

「要するに、ね。お兄ちゃんの力で、僕を……僕のお母さんを助けてよ」

しばらく話を聞いてから、俺は子供——後から名前を聞いた、エミリオというらしい、言われてみると外国人っぽい顔立ちだ——を車に乗せて事務所に向かった。何にせよ、黒に報告しなければならぬ。こいつの魔法で黒の体の一部分が壊死しているというのなら、なんとかなるかもしれない——そんな淡い期待を抱きつつ、流石に手を縛った状態の子供を連れて歩いていると怪しまれるだろうと判断して、エミリオを車に乗せた。

「結局、俺の家の嫌がらせもお前の仕業だったってことでいいんだよな」

「嫌がらせてって、心外だよ。あれはアートだからね、アート。お兄ちゃんをおびき寄せるための」

というような理屈らしい。思えば、自宅の玄関扉に張り付いていた異物からも、腐敗臭がしていたんだろうか。

「あの汚いの、結局何だったんだ？」

「その辺にあった野良犬とか鳥の死体。を、さらに腐らせたもの」
「げっ……」

子供は時として残酷である。そう思った。もちろん、魔法を使えるという特殊な境遇にあるからこそ、エミリオは平気で犬を利用したのかもしれないが。

「お前なあ。命は大切に扱えよ」

大人として、人生の先輩として忠告してやらねば。そんな義務感が俺の中に芽生えた。

ちらと窓の外を見やれば、朝焼けに照らされた紅葉を置き去りにしてめまぐるしく風景が変わっていく。考えてみると、あの紅葉も死んだ動物や落ち葉が腐ってできた養分を吸い取っているということに気がつく。

エミリオはまだ若い、否、幼いとさえ言える年齢だ。確か本人から聞いた話では一〇歳だっただろうか。この年齢で、ここまでの度胸を持つて犬の死骸を腐せたり俺に不意打ちをかけようとしたりというのは、どんな経験を今まで積んできたのだろうと少し感傷的になった。

「命って……死体じゃん」

「死体でもだ。自然になんかするのはあんまりいいこととは言えねえぞ。百歩譲って俺を殺したとしても、だ」

「どついう譲り方なのさ……。自然に人間がいろいろ手を出さないのって、そんなに大事なこと？」

「お前もそのうちわかるさ」

抽象的な会話ばかりしていると、事務所に近づいた。歩いて五分の距離にあるのだから、車で行った方がむしろ時間がかかると思っていたのだが、早朝ということもあってか渋滞にはほとんど巻き込まれなかった。それ故にすぐについてしまうのは当然のことだった。俺は三つしかない駐車スペースに車を駐車し、「よし、さつさと降りろ、さつさと」とエミリオに降車を促した。

「手が使えないからドア開けられないよー」

「面倒くせえなあ……ほれ」

俺は運転席から出て助手席のドアを開き、両手を後ろ手に縛られ

ているエミリオをひきずりだした。そしてそのまま、エミリオを連れて事務所に入った。

鍵は、開いたままだった。

「おはようございまーす……誰か居ますか？」

事務所に入るなり、俺はここにいるかもわからない誰かに呼びかけた。

しばらくすると、たったたという小走りをするような音が聞こえて、ぱつと入り口近くに霊歌が顔を出した。

「まだオープンしてませんけど、そっち系の用事の方ですかー？」

……って、吉川君か」

「吉川君かって……」

どうしてそんなに落胆したような顔をする。

「だいたい、そっち系の用事ってどんな」

そこまで俺が言いかけてから、霊歌があつと声をあげた。

「そ、その子ってまさか……」

「いや別にそんな」

「誘拐！？　もしくは隠し子！？」

「どっちも違いますか！？」

いつもは冷静に事務的タスクをこなす霊歌だが、こういうスキヤンダラスな状況になると一転して動揺するらしい。そういえば前に俺と黒が一緒に出勤したときも、謎のフィーバーを見せていた。思いついたくもない、最悪の記憶である。

「いでっ！？」

そんなことを考えていると、事務所の奥から何かが飛んできた。それは俺の頭にぶつかり、パカンという爽やかな音を立てる。

床に落ちたそれを拾い上げると、スプーンだった。

「痛ー……どつからこんなもん……」

「こっからだ」

声のした方向を見ると、例のあの人——黒が立っていた。

「社長！？ 寝てなくていいんですか？」

「病人じゃあるまいし。ただ単に体がすこし痒いだけだ」

あれ？ 壊死って痒いんだっけ？ 確か感覚なくなるんじゃないかな
ったっけ？

クエスチョンマークで俺の脳内が満たされる。

「第一、何で社長が俺にスプーンを……」

「いや、社長に対して何かよからぬことを考えていたようだったかな。確か、『思い出したくもない、最悪の記憶である』とか何とか」

「あんたもうその読心術神の域に達してませんか？」

「いやあ、ははは、照れるな」

「ほめてません」

何だか知らないが、的外れなことでスプーンを投げつけられ、的外れなことと照れられた。理由は不明だが、損をした気分になった。

「ん？ そのガキは？」

今になってようやく、黒がエミリオに対して聞いてきた。エミリオは子供らしい「ん？」という顔をしている。

「反応が圧倒的に遅いです！ …… って、え？」

なぜ黒が、エミリオの顔を知らない？

…… 黒は、エミリオに襲われたのではないのか？

いや、そんなはずはない。だって、黒の体の一部——正確には、右腕の肘近くと腹の臍あたり、左脚の数力所——の壊死は、エミリオの魔法によるものはずだ。彼の腐食という魔法で、黒はけがをした——

もし、そうではないとしたら？

「おい、エミリオ」

「なに、お兄ちゃん」

「お前、このおばさ……お姉さんに魔法使ったか？」

がすつ。鈍い音とともに拳骨が飛んでくるが今はスルー。

「うつん、使ってないよ。だって昨日の襲撃が最初だし……」

何だと。

「えっ、じゃあ、誰が社長を……」

「お前と同じ、魔法使いみたいなやつだ」

黒が顔をしかめた。

「私がこんなガキにやられると思ったのか？　癪だけど、私が負けたのは、もっと高身長の方だったぞ？」

そういえば昨日、ぼろぼろになって帰ってきた社長から、何も犯人についての話は聞いていない。もちろん、犯人の容姿についてもだ。

「で、でもこいつはものを腐らせる魔法が使えて…… たぶん社長の壊死もこいつが……」

「違うよ、僕じゃないよ！」

「そいつもそうなのか……」

最近多いな、と黒が言う。たぶん、魔法使いが、ということだろう。國山のことは、靈歌に報告済みだったので、そこから黒に伝わったのかもしれない。

「というか、吉川君」

靈歌が補うように付け加える。

「壊死と腐敗は…… 根本的に、別物だって、まさか分かってない訳じゃないよね？」

……あ。

「やっぱり、凶星って顔してる」

靈歌が俺の顔をびしっと指さした。

「思いこみで行動するのは危険よ？」

「は、はい……」

何だか、いろいろ振り出しに戻った。

結局、黒を襲ったという魔法使いはどこにいるかもつかめない。おそらく目的は國山やエミリオの言う「国際魔法機関への連行」なのだ（適当な見当はつくが）（その言葉がなにを意味するものなのかは未だに知らない）、じゃあなぜ俺ではなく黒を襲撃したのか。

「えー……」

エミリオを捕まえて大捕り物だと思っていたのに、狐に摘まれたような気分だ。

不完全燃焼の胸くそ悪さだけが、後に残った。

第十七話 治癒魔法

魔法での傷の治療というのは、思っているよりも骨が折れる。魔法はふつうではあり得ないことを引き起こす力だと俺は長年使ってきたので結論として認識している。だが、そのなかでも傷の治療という、本当に細かい意識の操作が必要になる。単に「治れ」と念じるだけでもいいのはほかの魔法と変わりないが、失敗したときのリスクの高さばかりが脳裏をよぎり、緊張してうまく力が操れないことが多い。

故に、今回の黒のような特殊なけが——魔法によってつけられた傷を治す場合や、一昨日のヤクザがらみの仕事のような危機的な状況でない限りは、ほとんど使用したことがない。もちろん、体力が「持っていかれる」から、という理由もあるにはあるが。

両手を患部に近づけ、魔法を行使する。肌の青紫色が目に見える形でもとの肌色に戻っていく。

「大丈夫そうですね？」

横合いから霊歌が心配そうに黒に尋ねた。

「ああ、そもそもそんなに痛い訳じゃないしな。ただ脚とかはちょっと動かしにくいから困ってたけど」

黒がそう答えた。全くもってタフな人である。壊死というのは細胞が死ぬことだ。ふつうならもう少しうろたえてもよさそうなものを、黒は全く気にとめる風もない。それよりも、早く犯人を捕らえたいという思いでうずうずしているように見えた。

「社長、無理は禁物ですよ。魔法で傷は治るかもしれませんが……」

……

「治るかもしれないけど、何だ？」

「俺が疲れます」

「いや、そこかい」

もう少し社長に対する気遣いというものをな、だいたいお前の依

頼で私は動いていてこんなことに云々と言葉を並べる黒。

そんな俺たちの様子をじっと傍で眺めていたエミリオが、突然口を開いた。

「お兄ちゃん」

「ん？ 何だ？」

お兄ちゃんという呼び方があまりに板に付きすぎていてついつい忘れかけるが、こいつはあくまで俺を襲ってきた魔法使いだ。油断はできない。ちなみに、両手も未だ縛ったままだ。

「どれくらいのことまで、魔法でできる？ その、傷を治すとか、そういうことで……」

どうしてそんなことを聞くのだろう、と考えてから、思い出す。

——要するに、ね。

——お兄ちゃんの力で、僕を……

——僕のお母さんを助けてよ。

もしかすると、エミリオの母親は、病気が何かなのだろうか。

「……まず大前提として、俺の体力が続く限り、たいていのことはできる。だから、力を使いながら、栄養とカロリーを摂取し続ければ、たぶんたいていのことは可能だ。だけど」

國山と本気の殺し合いをしたときの経験則から言うならば。

「あんまりやりすぎると、血を吐いちまう。俺自身の内臓がスタスタになる。まあそのズタズタも、後から魔法で治せりゃいいんだが……」

すると、エミリオが首を横に振りながら口を挟んだ。

「魔法を使って壊れた体は、たぶん魔法じゃ治せない。確か『魔法干涉と物理的エネルギーの関係法則』っていうのがあったと思う」

「何だよその胡散臭い法則……ていうか、何でそんなもん知ってんだよ」

「魔法書で読んだんだ。魔法書って言っても、魔道具の方じゃなくて理論書だけどね」

「ふーん」

どうやら、俺の知らない世界のどこかには、魔法について書かれた本も存在するらしい。正直、魔法が体系的に理論としてまとめられているということに驚いた。

「まあそれはいいとして……具体的に、どのくらいまで治療できるの？ その……不治の病、とか」

不治の病。治らない病。

確かに、魔法であれば治らないものも治るかもしれない。だが、それを治そうとするということは、著しく現実的なものから非現実的なものへと事象を改変することになってしまう。

俺が普段使っているライターの火程度の大きさの魔法だったら、「すこしおかしいこと」や「ちよつとした手品」で済むことかもしれない。國山やエミリオとやりあったときの魔法も「奇術」まででとどまる。だが、不治の病が完治することは、もはや人知を越えた「奇跡」だ。

「……正直、やれる気がしない。もちろん実際にやってみないことにはわからないけど、それでも、あまり過度な期待はしないでもいい」

その言葉を口にしてから、俺は後を追うようにしまったと思った。エミリオに手を貸すことを前提とした言葉となってしまうことに、気が付いたからだ。あれだけ油断すまいと思っていたのに。まだどんな罫があるかわかったものではない。

だが、今までのエミリオの言動を見る限り、ただの母親を心配する子供のようにしか感じられない。もしかすると、こいつのために何かしてやってもいいのかもしれない。そう感じた。

俺の「過度な期待はしないでほしい」という言葉に、エミリオはあからさまに落ち込んだ。

「そっか……まあ、やってみないとわからないって言うんだったら、お願いしようかな」

お願い。

さっきの交換条件とやらだろうか。

お母さんを助けてほしい——ただの一人の息子としての、素直な願い。

「ちょっと待った」

俺とエミリオの会話に、霊歌が待ったをかけた。いったいなんだというのだろうか。

「お願い、って言ったね。エミリオ君……だっただけ」

「う、うん」

「じゃあうちの会社にしなさいな。なんたってうちは、あのトラブル解決屋なんだからね」

そう来たか、と思わず舌を巻いた。何でもビジネスにしてしまおうという気持ちから出た言葉なのか、それともただの良心か。いや、疑るのはよそう。良心だとしておいた方が、気分がいい。

「えっ、でもちょっと待ってください。うちへの依頼扱いにしたら、料金が」

「その辺はまあ、心配ないよ。だいたいうちの有能な社員を殺しかけたっただけで、ハナから賠償はもらおうと思ってたし」

「腹黒い！」

前言撤回。良心じゃなかった。ビジネス根性だった。

「うん、僕の方もそれでいいよ。まあ何人増えたってお兄ちゃん一人居ればいいことには変わらないけど。お金はあるし」

あるのかよ。

エミリオはポケットの中からなにやら紙束のようなものを取り出し、その束から一枚を千切り取った。続いて今度はペンを取りだし、紙に何かを書き込み始めた。

「……なにしてんだ？」

「へっへっへ」

どうやら書くことを書き終えたらしく、ペンをしまうと、その紙を俺たちの方に見せた。

『小切手 金参拾万円也 Emilio Willson』

「いやちょっと待てちょっと待てどうしてお前が小切手なんか持つ

てる」

「えー？ そんなに気にしないでいいよ。どうせはした金だし」

「この世に三〇万円をはした金と呼べる子供が居ること自体にかなりの問題があると思うんだが」

「まあ、お父さん社長だし。これぐらいふつうでしょ？ だいたい僕が日本に来たのもお父さんの貿易船にこっそり乗ったからだし」

社長。貿易船。どうにもスケールが違いすぎて話についていけない。

「私の見立てだと、たぶん吉川君の生涯賃金を遙かに越える額の貯金をすでに持っているわね、この子……」

「ごくりと霊歌がのをならす。

「どうしてそんな落ち込むこと言うんですか！」

「まあまあまあ。どおどおどおどお」

「俺をあやすなエミリオ！」

「いいじゃない、三〇万円ももらえるなら、どんな仕事だっておやすいご用よ」

この人もどうやら金のために働いているらしい。案外楯よりも金にはがめついのではないだろうか。

まあ、霊歌が満足しているならもうそれでいいか、と思ったそのとき。

「……おい、お前。いつまでアタシの脚を触っている。もう治つてるだろ流石に」

「うおい！？」

いえ、触っていません。ただちよつとかざしてただけです。断じて触っていません！

そんな言い訳をする間もなく、黒のアップパーが飛んできた。

第十八話 世界の広さ

黒の傷も癒えたところで、とりあえず俺はぐったりとしながら（かつ栄養ドリンクを飲みながら）エミリオの話を聞くことにした。時刻は現在午前五時半。さすがにまだ客は来ないだろうということ、靈歌と黒も並んで話を聞く姿勢をとっている。

「まずは……。お兄ちゃん、いきなり襲ってごめんね！」 明るい。そんな明るさで言う言葉じゃあないと思うのだが。

「……何であんなことしてきた？ 俺に頼みごとがあるなら、始めからそうすればいいのに」

俺がああ借家に住んでいたこと、魔法が使えることが分かっているなら、正面から頼みごとをしてくればいいはずである。

「うん。だってあの時はまだ、お兄ちゃんがケガとかまで治せるって知らなかったし。ただ『すごい魔法の才能の持ち主がいる』って噂を聞いてたから、お兄ちゃんをなんとか捕まえて魔法機関に渡せば、治療術の魔道具をもらえるかもしれないと思ってさあ……」

また出た。例のキーワード、「魔法機関」。確か、國山も口にしていた言葉だ。

「魔法機関……って、何なんだよ？ そういやお前、ライセンスがどうかってのも言ってたよな」

エミリオは、話してよいものなのか、という躊躇うように首を捻った。

「うーん……ふつう、部外者の一般人には話しちゃいけないっていうルールなんだけど……もうそこのお姉さんたちは部外者じゃないし、いっかー」

「お姉さん……」

心なしな女性陣の目が輝いているような気がする。特に靈歌の目が。黒は気にしていないような素振りを見せているが、やはり女、実年齢よりも若く見られることをうれしく感じるくらいに女々しさ

はあるのか。

「じゃあ、まずはそこから。国際魔法機関の話からだね」

国際魔法機関。

名前の通り、魔法に関することを取り扱う世界的な機関だよ。もちろん、一般人……魔法のことを知らない人たちには伏せられているけどね。

基本的な役割は、魔法使いたちの管理と統轄。魔法ってのは使えるだけで有名になったりとか厄介だから、なるべく大事にならないように身を隠すのが、魔法使いの常識だね。そしてそれを手伝うのが魔法機関だと思ってくれたらいいよ。

あとは、魔法使いに「魔道具」を支給すること。これは魔道具師っていう人たちが手作りしてるんだけど、どういう人たちなのか、何人いるのか、どうやって魔力を持った道具を製造しているのかは、全部非公開なんだ。全員が魔法機関の下で働いているらしいけどね。どうして魔道具を支給するのかって言うと、これは正直よくわからない。魔法の隠匿が目的なのに、魔法を使うことを助長するようなものをばらまく訳は、たぶん機関の中でもトップの人たちだけが知っているんだろうね。ただ一つ言えるのは、強力な魔道具ほど、魔法使いを釣るエサになるってことかな。

魔法機関は、魔法を世間に明かさないようにすることが目的だから、なるべく魔法使いをその支配領域内に入れておきたい。だから機関からライセンスを発行して、魔法使いたちの管理を行う。それに、ライセンスを持っていないお兄ちゃんみたいな魔法使いを捕まえて無理矢理でも支配下に置くこともしなきゃいけないから、管理された魔法使いたちにお兄ちゃんみたいなのを捕まえさせるんだ。殺してもかまわないけど、殺したら機関からの報酬がもらえないから、たぶん殺されることはないだろうね。安心していいよ。

そうそう、報酬って言うのは、さっき言った魔道具と、ライセンスのランクアップ。ライセンスは白、緑、青、紫、赤ときて銅・銀・

金の八段階に分けられているんだ。僕だと緑、あのわりと有名な氷の魔法使いだったら銅って言う風にね。

ライセンスのランクが高いほど、強い魔道具をもらえるし、機関の中でも融通が利くようになるらしいよ。まあ、僕は緑だからそれがどれくらいのものなのかはよく知らないけど。

「……つと、こんなもんかなー。これぐらいは魔法使いの常識だと思うから、さつさと頭に入れてねお兄ちゃん！」

あー長台詞疲れた、だるいだるいと自分の手で顔をぱたぱたと仰ぐような動作をするエミリオ。

「……常識か。世界は広いな」

「まったくね。びっくり」

「まあ、そんなもんなのかもな」

三者三様（俺含む）の感想。なんだかんだで、一番驚いているのは俺かもしれない。

だって、今まで「自分しか使えない力」だと思っていたものが、管理・統轄までされるほどに世界に広まった技術だったということを知ってしまったのだから。

國山と出会ったとき、俺は自分以外にも魔法を使える人間がいることに戦慄すら覚えた。だが、世界中に、あんな魔法使いがごろごろ転がっているとは。

そして、俺もその「ライセンス」を取らない限り、これからその魔法使いたちにねらわれるのだろう。

「まあ、そんな感じ。で、僕はお兄ちゃんを何とか捕まえて魔法機関に献上奉れば、『ものを腐らせるグローブ』よりもいいものももらえるかと思っただ。それで、人の傷を治せるようなものがもらえればよかつただけど……」

「……そういうことだったのか」

「まあ、そもそも僕はものを腐らす以外にあんまり適性のない魔法使いだからね……。たとえなんとかそういう魔道具をもらえたと

しても、扱いきれなかったんじゃないかなって、今なら思うよ」

だが、もし俺を捕まえていれば、こいつは不治の病の母親を助ける術を手に入れられたかもしれない。それで、俺のことをねらったのだろう。

今話を聞いて、もはやエミリオを責める気はほとんど失せた。

俺はエミリオの後ろに回り、手を縛っている縄を解いてやった。

「おい、外していいのか？」

黒がおれに意志確認するように問いかけた。

「はい。たぶん、こいつは信用していいと思います。少なくとも俺は、そう思いました」

「……お前がそう決めたなら、それでいいか」

黒はふうとため息を吐いてから、上を見上げた。天井よりももっと先の、空でも眺めているような姿勢だ。

「お兄ちゃん、さんきゅー。じゃあ、お願い聞いてもらえる？」

ついさきほどまでの、説明をしようと子供ながらに真剣そうだった態度から一転して、エミリオは軽く話しかけてきた。

「ああ。お前の母さんを助けるんだったな、確か」

「うん。まあまだ具体的なことはなにも話してないけど、とりあえずはそういうことだよ。お母さんの病気が、もしパーセントでも治る可能性があるなら……お兄ちゃんの力に賭けてみようと思う」

改めて、しっかりした子供だな、と感じた。ふざけているように見えて、物事についてきちんと考えている。頭も良いようだし、この年上を舐めきった態度さえなければ完璧な子供だろう。

「本当は、傷を治せるような魔道具があったら、それが一番いいんだけどね……」

エミリオはつぶやいた。確かに、俺が体一つで治癒を発動させるよりも、魔道具があった方がいい。

「まあ、一回目でだめだったら、俺もその『ライセンス』っていうのを取るよ。そしたら魔道具ももらえるだろうしな」

それに、ライセンスさえとってしまえば、俺がねらわれることも

なくなるのだろうし。

「……さつきから話を聞いているが、ぜんぜん分からんな」

黒がうんざりとしたような表情で言った。確かに、魔法を使えない人間からしたら、また魔道具がどれほどの威力を秘めたものなのか知らない人間からしたら、雲を掴むような話かもしれない。

「というか、聞いていて思ったんだけど」

しかし、靈歌はふつうに理解しているようだった。……靈歌の頭が良いのか、黒の頭が良くないのか。どちらだろう。

どちらも正解のような気がした。

「エミリオ君が吉川君を捕まえたことにしとけば、エミリオ君も吉川君も、その『マドウグ』？ をもらえて、一石二鳥なんじゃない？」

「……あ」「」

俺とエミリオの声が重なった。

やはり、靈歌はかなり頭がいいらしい。

こんな仕事に就かなくても、もっと言い働き口があっただろうに……。

第十九話 イングリッシュボーイ

「よーっす」

「おはようございます！ …… あれ、芳樹君早いね」

午前九時五〇分。事務所の開業一〇分前に、槇と咲が出勤してきた。昨日の激しい任務の疲れも見せず、澆刺としていて明るい。本当に、あれくらいのことはそれほど珍しいことでもないのだろうな、と思わされる。

「おはようございます。いやー、ちょっと事情がありまして」

「ふーん、そうなんだ…… って、黒さんもう起きても大丈夫なの？」
来客用のソファにどつかと座り、亡、と呆けている黒を見て、咲が驚いたような声を上げた。あのぼろぼろの状態で帰ってきたのが昨日、そして今は普段となにも変わらない姿勢。驚愕するのも頷けるし、無理はない。

「ああ。こいつのトンデモ能力で治してもらった」

黒は俺をびしっと指さして言った。

「トンデモ能力は社長の方でしょ……。あれだけぼろぼろの状態で『ちよつと痒い』って感想しか漏らさなかったんですから」

「昨日のインパクト大の帰宅は何だったんだよ」

槇が苦笑する。言葉とは裏腹に、「もう社長のやりたい放題には慣れた」という内心を表情でありありと物語っている。

「ふー、子供の相手って疲れるわね」

霊歌が事務所の奥から顔を出す。

「あ、槇君と咲ちゃんも来たのね。…… うん、時間通り」

自分の右手首に付けた腕時計を見て、満足げに微笑む霊歌。その様子を見て、俺はちよつとした疑問を抱いた。

「あれ？ 幸崎さん、左利きでしたっけ」

俺に問われて、霊歌は両手首を俺の方に向けて示した。

「じゃじゃーん、ってね」

「あれ？ 二個？」

「両手に付けとくと以外と便利よ。机に手を置いた状態で座っていると、たいていの場合どっちかの手は視界に入ってるから、目線を動かしただけで時間が確認できるの」

「へーっ」

「おもしれえ」

今まで気づかなかった、というような面もちで咲と槇も声を上げた。さすが「デキる女」、といったところか。

「じゃあ、右利きなのか？」

槇が尋ねた。

「いや、両利きよ」

さらりと答える霊歌。ますます「デキる女」度合いがあがっている気がする。後光さえ見える。

霊歌のあの事務処理能力の高さは、この両利きという特性に由来しているのだろうか。

「黒さん、すごくない？ 霊歌さん、両利きなんだって！」

咲が喜々として黒に言くと、

「え、知らなかったのか？ アタシは知っていたぞ」

当然だろうというふうに手をヒラヒラとさせながら答えた。社員たちのことはなんでも知ってるぞ、と言わんばかりにふてぶてしく足を組む。

うわー黒さんがきやりあうーまんに見える、ほんとだあれはすごいかつこよすぎるぜ社長といった様子で咲と槇が尊敬の眼差しで黒を見つめた。いや、確かにすごいけれど、そこまで興奮することだろうか。

他愛なくも、普段と何も変わらない日常。

そこに、イレギュラーな要素が、唐突に組み込まれた。

「ふぁーあ……眠……」

事務所の奥から、つい一分前まで寝ていましたという表情のエミリオが出てきたのだ。

当然、エミリオのことを見たことがない槇と咲は固まる。そして、あらぬ妄想に走ってしまうのだった……。

「え、なにこの子？　かわいい……お人形さんみたい、男の子の」

「なんだよこのガキ……」

「おはよう、お兄ちゃん……」

「「お兄ちゃん!？」」

槇と咲が俺の方を見る。いや、違いますから。

「かかか隠し子!？　まさか芳樹君にそんなシークレットが」

「い、いや、これは『隠し弟』だ！　きつとそうだ!」

「あ、あのー、向日さん？　瀧澤さん？」

あれー瀧澤さんはともかく向日さんってこんなキャラだったっけか、と思わず戸惑ってしまう。いや、だったっけか、というのも俺のキャラから随分と遠いところにある感想だと思うが。

「という冗談はさておき」

「冗談だったんですか……」

槇は少し自由奔放すぎる。ついていけない。

「こいつ、誰だ？　また依頼絡みか？」

だが、勘は鋭いようで、ずばり言い当てた。もちろん、ただの依頼ではなく、俺の私的な事情も多分に絡んだ依頼であり、そこまで予測できているとは思わない。

「実はな、ちよつと訳ありの依頼で……」

黒が依頼のことについて話し始めた。

槇と咲はそれにじつと聞き入っていた。

「そつか……。やり方は感心できないけど、お母さん思いのいい子だね」

事情を把握し終えた咲が、エミリオの行動の一部始終に対して感想を述べた。右手をエミリオの頭に乗せて撫でてやる。

「芳樹君だったからよかったものの、もっと怖い人だったらただじゃ済まなかったかもよ?」

実際、肋骨が折れるほどの勢いで壁に（魔法で）押しつけてしまったのだが、それは言うまい。どうやら子供好き、というか子供に好かれる才能のあるらしい咲に漏れると、どんなお仕置きが待っているかわからない。

エミリオは意味ありげな目でこちらをちらりと見やったが、なにも言わなかった。

「じゃあ、その母親のどこにいけないといけねえんだな？」

槇が確認するように霊歌に問った。

「そうね。まあ、私たち全員で出向く必要もないと思うけど……。そういえば、お母さん、どこにいるの？」

今度は霊歌がエミリオに質問する。相変わらずのほほんとした咲に撫でられているエミリオは、本人の言葉を信じるならばまだ一〇歳だ。しかし、行動の指針や思惑がともしっかりしているところを見ると、母親の居場所についてもきっちり説明してくれるだろう。そう信じての問だということが伝わってきた。

エミリオはその問に、期待通り答えた……のだろうか。

「ロンドン！」

……はい？

「えー、知らないの？ ロンドン。僕の出身。イギリス、正式名称グレートブリテン及び北アイルランド連合王国の首都」

「い、いや、それは知ってるけど」

よくそんな長い正式国名覚えてたな。

「で、でもよ、ロンドンまで行かないといけないのかよ？ そんな貯金、俺持ってないぞ」

「大丈夫。お金はあるっていったでしょ？」

につこりと、というより、にやりとエミリオが笑った。

「だいたいさ、国際魔法機関の本部もロンドンだし。どうせ行かないといけないことには変わりないよ。あ、むしろ僕のお母さん助けるのとライセンス取りに行くので一石二鳥だね！」

「ぶい、と指でピースを作るエミリオ。どうして俺がそんなに遠い異郷まで出向かないといけないんだよ、と落胆する俺を余所に、咲が少ししゃがんでピースをエミリオに返した。

「いやいや、観光も兼ねて一石三鳥ですな！。やったね、芳樹君！
ていうか、私も行って良い？ エミリオ君」

「いいよ、お姉ちゃんも。というか、みんな来てよ！ お金の心配はいらないからさ」

「子供にお金全部払わせるのは気が引けるわね……」

霊歌が頭を押さえていった。よかった、まともな完成の持ち主が居て。そう安心した矢先のことだ。

「でも、ロンドンは行ってみたいのよね！ テムズ川、セントポール大聖堂、ウエストミンスター寺院に大英博物館！ ロンドンナショナルギャラリーにも行ってみたいし……」

異様にロンドンについて詳しくかった。ロンドンの観光名所を右から左へ全てさらっていくように挙げる霊歌。最早誰もその暴走を止めることはできそうになかった。

「幸崎お前、そう言えば去年のゴールデンウィークのロンドンツアー、旅行会社の倒産か何かでお預けになってたな……」

「それであんなに詳しいんですか……」

積年の思い、恐るべし。あの剛胆で「何でもドンと来い」な器を持つ（というか基本的に何が来ても気にしない）黒でさえ、若干ヒいていた。

「まあ、社員旅行だと思えばいいんじゃないか？ なあ、黒さん。

このガキもカネの心配はいらないつつつてんだし、甘えさせてもらおうぜ。こっちは依頼で行くんだしな」

楨が平然とした顔で黒にそんなことを言った。この人もこの人で、器が大きい。それが逆に仇となっているような気がしてならないが、黒はしばらくの間黙って考え込んだ。これで黒がゴーサインを出さなければ、万事休すということになる。

「……芳樹、お前が決める」

あ、この人絶対面倒くさくなって俺にぶん投げやがったな。

「俺だって、別にロンドン行きが嫌な訳じゃないです。そりゃ、觀光もしたいし、それ以前にこいつの依頼、願いを叶えてやりたいですしね。ただ、急すぎるというか、何というか……。俺はみんなと違って、『魔法機関』のこともありますから、ちよっと弱腰になってるっただけで……」

「ああもう、どっちなんだよ！ さっさと決めやがれ洒落臭え！」

B Y、エミリオ。出会い頭の江戸っ子口調といい、今の言葉といい、どうやらこいつはタガが外れると急に本性を表すらしい。事務所の面々も少し驚いているようだったが、すぐにエミリオの言葉に乗ってきた。

「芳樹君、依頼はちゃんと解決するのがうちの事務所の社訓だよ！」

「そうだぞ芳樹、それにそのライセンスつつうのも取っとかねえといつ襲われるかわからねえ生活が続くんだろ？」

「芳樹君、セントポール大聖堂見たくないの？」

「おい、さっさとしろ」

一人おかしい人がいた。あと、一人取りあえずこの面倒な問答を終わらせたいらしい人がいた。でも気にしたら負けだ。

「……ああもう！ わかりました行きます行きましよう！」

結果。

トラブル解決屋「NaN」の臨時休業（一週間の予定）と、社員全員＋エミリオでの渡英が決定した。

第二十話 渡英

イギリス。

誰もが一度は行ってみたいと思うであろう、紳士の国だ。

俺は今、その異郷の上空にいる。正確には、上空を飛ぶ飛行機の中にいる。

飛行機はどんどん高度を下げ、地表に近づいていく。雲を突き抜け、景色が見えるようになる。未だ昔ながらの煉瓦づくりの建物の暖かみを残した住宅街。キリスト教文化圏であることが一目でわかる大きな教会。そんな夢のような世界が、現実の映像となって俺の脳に飛び込んでくる。

窓から目を逸らし、機内をぐるりと見渡す。すぐ隣には、すうすうと寝息を立てるエミリオ。その横には、同じように寝ている、否、エミリオの数倍は堂々と胸を張って（巨乳がどうかはこの際関係ない）黒が寝ている。後ろには槇と咲、靈歌がいるはずだが、やけに静かだった。機内には、やはり日本人が多いものの、白人や黒人、日本人と同じモンゴリアンではあるが少し顔つきに特徴のあるアジア人の姿も散見される。やはり平日ということもあって、仕事で移動している最中であろう男性が多く目に付く。団体客はどうやら俺たちだけのようだった。

「*****」

英語のアナウンスが響く。残念ながら学のない俺は意味を全くつかめない。それに続いて、

『当機はまもなく着陸いたします。ランプ点灯中は、ベルトをしっかりと締めたまま……』

日本語でのアナウンスが響く。

「エミリオ、そろそろ起きろ。ほら社長も」

小声でそう言いながら、エミリオと黒の肩を揺すった。

「う、うーん……。ねみー……」

ぼーっとしながらエミリオがつぶやく。目を覚ましたようだ。
しかし、黒は相変わらず目を瞑ったままだった。思ったら、いきなりカッと目を見開いた。

「うわっ」

思わず身を引く。正直、ホラー映画とさして変わりないほどの恐怖だった。ああ、この人が目覚めてしまった、人類は終わりだ——というような恐怖感である。

破壊の化身のごとき扱いになってしまっていることに、黒は気づいているのだろうか。いつも通りなら、ここで一発ナックルが飛んで——

ぼーっ。

「いつも通りナックルを飛ばしてやったぞ、感謝しろ」

黒がにこりと（つまりは腹黒く）笑いながらそう言った。感謝する要素など微塵もなかった。

「……機内での暴力行為はご遠慮くださいお客様」

「お前はいつからこのCAになった」

寝惚けたエミリオをはさんでの、俺と黒の無駄話。

それは、飛行機の着陸用車輪が伸び、機体が地面を滑る騒音と衝撃にかき消された。

「着いた！ イギリス！ 英国！」

空港を出てその光景を目の当たりにするなり、靈歌ははしゃぎだした。普段のクールでオトナなお姉さん、というイメージからはほど遠いはしゃぎっぷりだ。無理もないかもしれない。なにせ、ちょっと前の大型連休時に予定していたイギリス旅行がお流れになってしまっていたのだから。

「幸崎、仕事だぞ……」

黒が苦笑いしながらそんなことを言った。

「社長に注意されてたら終わりだな」

「世も末だね」

「エミリオ、悪い、案内してくれるか？」

「一〇歳の子供にガイドさん代わりさせないでよね……まったく、変な人ばかりで疲れるよ」

そんな風にわいわいと騒ぎながら、俺たちはひとまずホテルを指した。エミリオはどうやらこのあたりの地理に詳しい様子で、「あっちの路地を曲がるとおいしいパン屋さんがあつてね」などと、本当にガイドのように俺たちをつれていってくれる。

ロンドンが地元、というのは、どうやら本当だったらしい。いや、そもそも嘘ををついていると疑っていたわけではないが。

ふと気になったことがあったので、エミリオに訊いてみることにした。

「なあ、お前英語話せるのか？」

俺にとつては素朴な疑問だったのだが、エミリオはそれを聞いて、ぶつと吹き出した。

「当然だよ。イギリス人なんだから」

「いや、でもそんなに日本語流暢だし……」

はつきり言つて、イントネーションのおかしさもほとんどない。これでもし英語が母国語だというのならすごすぎる、と素直に思った。生まれてすぐに日本に来てずっとそこで過ごしていた、というような可能性も考えてしまう。

「僕は生粋のイギリス人だよ。お父さんもお母さんも、ね。日本語がうまいのは、教育のおかげ」

教育。この年齢で、完全なバイリンガルになるほどに、日本語をたたき込まれたということか。

良家の出身だということは知っていたが、まさかそこまで英才的に物事を教えられているとは。

「でも何で日本語なの？ 英語の次に学んだつたら、スペイン語とかだと思っけど……」

靈歌が話に入ってきた。確かに、ヨーロッパの圏内の言語を学ぶよりも先に日本語を学んだというのには、違和感が残る。

「ああそれは、別に勉強してるの日本語だけじゃないからね！もうさ、いろんな無駄な言語擦り込まれちゃったよ。スワヒリ語とか……」

「スワヒリ語！？」

マイナーすぎやしないか。いや、そのような言語も含めて、メジャーなところはすべて押さえているというのか。

いやはや、曙光である。エミリオ君イギリス出身一〇歳、実は天才でした。

雑談をしながら歩いていると気づけばホテルまで到着していた。

「早く入ろうぜ。俺もう歩くの疲れたわ……」

「しゃきつとしなよ、榎君！イギリスだよイギリス！」

全員で、ホテルの扉——回転式のやつ、そういえばこれに巻き込まれる事故が何年か前に日本でも多発したなと思い出した——をくぐり抜ける。その瞬間、豪華なシャンデリアやら装飾の施された階段やら真つ赤な絨毯やら鹿の剥製やら——所謂、お金持ちの家っぽい内装がやたらと目に付いた。

「うわあ、すごいすごい！」

「金かかってそうだな……もったいない」

「びっくりですなあ、これは」

「うわあ……入りづらい」

「とりあえず入れ。じゃまだじゃまだ」

五者五様の感想。ちなみに、上から靈歌、榎（この人金好きだな）、咲（調子に乗っている？）、俺（正直な気持ちだ）、黒（とりあえず休みたいらしい）。

「まあ、これくらいふつうだよ、ふつう」

プラスワン。お金持ちのエミリオばっチャマ。妙にイラッとする言葉だった。いや、妙にというか、露骨にイラッとしてしまった。

その日はそのままホテルで一日過ごした。

夜になると、俺はメモ帳に明日の予定を記した。……これでも社会人だ、メモ帳くらいは持っている。ただ今までほとんど使ったことはない。予定表は常に空白だ。

『7：30 起床』

『9：50 国際魔法機関へ出発』

空白の予定表に、初めて文字が書き込まれる。

……どうしてこうなった、と思う。

——僕のお母さんに会いに行く前に、さっさと機関に行っちゃおうよ。

——ここは魔法使いたちの本拠地だよ？

——下手したら、明日目を覚ます前に死んでるかもね、お兄ちゃん。というのは、エミリオの言。簡単に冗談だと言い捨てることのできないので、質が悪い。このままふつうに執心しても大丈夫だろうか。まあいざとなれば、室内には櫃もいるので、どうにかなりそうなものだが。

先行きに不安の残る一日の締めくくりだった。

第二十一話 雑談&ぶらりロンドン町歩き（未遂）

いつものように、携帯電話のアラームで起床した。こうして目を覚ませたことに感謝、と、目を開いた瞬間に思う。どうしてここまですっきりしているのかというと。

よく眠れたから、ではない。

ほとんど眠れていないからだ。

「……眠れる訳ねえだろ」

昨夜エミリオに言われたことが頭から離れず、眠れなかったのだ。はつきり言ってしまうと、「ここは魔法使いたちの本拠地だから夜中に襲撃されてもおかしくない」という言葉に、ビビってしまったのだ。

この年になって恥ずかしい、とは思わない。何せ、命がかかっているのだから。

俺はベッドからのそのそと這い出ると、携帯のアラームを止めた。そして、ホテルの部屋——昨日見たロビーと同じように、無駄に広い——のベランダに出た。ポケットに、煙草を入れて。

……そういや、煙草吸うの久しぶりだな、と思う。久しぶりと言っても、三日ぶりくらいか。

実は禁煙していた。大胆カミングアウト。

いつぐらいからだろう。確か、ご近所さんからのいたずらの件（実際にはエミリオの仕業だったわけだが）で黒に依頼をした日からか。

この事務所が実は裏稼業をしていたということのショックで吸うのを忘れたのか。体を動かさないといけないから吸うのをやめたのか。

もうずいぶん昔のことに思えて、覚えていない。

ベランダに出ると風が気持ちいい。地中海性気候、だったか。違うかもしれない、よく覚えていない。

ポケットをまさぐってみると、当然のようにライターがなかった。もうこれはおきまりのパターンだな、と感じる。誰かに操られて魔法を使わせられているようにも思えた。もちろん、ただの杞憂なのだろうが。

「……んしょつと」

ボツ、という小さな音とともに指先に火が点る。普段からこうして使ってしまったので、どちらかというと火を扱う魔法が得意だ。

じゃあ、魔道具とやらも、俺は火に関するものになるのだろうか。どうなのだろう。國山は氷、エミリオは腐食。確かそんなところだったろうか。煙草を吸いながら、暢気にそんなことを考えていた。

突然、ぱたぱたという足音が聞こえる。この軽い音は、エミリオか。

「おはよう、お兄ちゃん」

「おう」

すぱーっと白い煙を吐きながら、朝の挨拶。ここのホテルは眺めも最高だ。赤煉瓦造りのロンドンの町並みが一望できる。東京やマカオやニューヨークの何千万ドルだかの夜景もいいが、こういう絵本みたいな世界も風情があって良い。

「起きるの、早いな」

俺がそう言くと、エミリオは目を擦りながら答えた。

「眠れなかったんだよ。ちょっと、緊張し過ぎて」

「何でだ？」

「正直言って、魔法機関にはあんまり行きたくないんだよ。怖い人多いし……それに、お兄ちゃんを捕獲したってことにする嘘見破られそうだし」

そう言えば、そういうことになっていた。エミリオが俺を——あの、襲撃の夜の流れのまま——無事に捕獲したということにすれば、俺は新規のメンバーとしてライセンスと魔道具を与えられ、エミリオも何らかの形で報酬を手に入れられる。靈歌の冴え渡った思考か

ら生み出された案だ。

「まあそのまま行けばいいんだけどね。よく考えると、無理だと思う」

「何でだ？」

エミリオは嘆息した。

「魔法相手じゃ、何でもかんでもアリだからね。嘘を見破る魔法、真実を吐かせる魔法、あるいは拷問の魔法」

「なんだそりゃ」

いや、魔法のすごさは俺も身を以て体感しているのだけれど。

その名の通り、「魔法の言葉」だ。何でも最後に魔法とつければオッケーなのだから。意中の異性をオトす魔法だとか、無限の金銀を生み出す魔法だとか、地球を破壊する魔法だとか。よく考えるとどうして今の世界に安定がもたらされているのかと不思議になるほど、魔法の力は——それほど、「機関」と呼べるものが存在するほどに、力を持つものが多いのであれば——脅威だ。

「……核がどうこうとかよりずっと怖いな」

「でしょ？ そんな魔法使いがうじゃうじゃいるところで、僕たちは嘘を吐こうってんだから……怖くもなるよ」

なるほどなあ。

俺は背伸びをして、欠伸をして、それからまた煙草に口を付けた。

「あ、煙大丈夫か？」

ふと思ったことをエミリオに尋ねる。

「うん。お父さんがよく吸ってる……吸ってた、からね」

含みのある言い方に引っかかるところがないでもなかったが、深く追求するべきではなさそうだ、と思った。本人が語らない限り、とりあえずは聞かない。

あくまでも、元狩る側と狩られる側の関係で、依頼主と解決屋の関係だ。本人の話す境遇に同情はするし、依頼を解決するために最大限の努力はするけれど、俺はこいつの親ではない。

ただ、男として、強く育って欲しいとは思った。もちろん脈絡な

くいきなりそんなことを言えるはずもなく、代わりにこう告げた。

「大丈夫だろ。嘘見破るだかなんだか知らないけど、俺に任せとけ」

「……うん」

しばらくの沈黙。

それから、けたたましく目覚まし時計（ベル式）の音が、部屋の中から聞こえた。しかしすぐにそれは止む。おそらく同室の檣が目覚ましたのだろう。

時間だ。

出撃の、時間だ。

時刻は九時五〇分。ホテルのラウンジにて。

「もっと観光したいのに……」

霊歌が落胆した様子でそう言うのを、黒は無視、檣も無視、エミリオは無視と言うより単に気を留めていないだけだがやはり無言で返し、咲だけがおーよしよしと（自分より年上の相手にも関わらず）霊歌を撫でて慰めていた。たまに上下関係がなくなる。

いや、上下とかないのもかもしれない。何せ天下無双の「NaN」

なのだから。

「しょうがないでしょう、こいつの依頼で来てるんだからまずはそっちを片付けないと」

俺はエミリオを指さしながら言った。

エミリオの母親の、不治の病の治療。それがここにきた目的だ。だが、今はそのための手段——もっと言えば、道具が欠けている。すなわち、治癒の魔道具。

使用者の魔力によつては、万病を治すことのできるであろう奇跡の力を発動する媒体。

これから出向こうとしている魔法機関では、なんとしてもそれを手に入れなければならない。俺のライセンス取得も（これ以上無駄な襲撃を受けないためには）重要な用事ではあるが、やはり魔道具を手に入れることが最優先事項だ。

そんな状況で。

「ロンドン観光なんてしてる暇、ある訳ないでしょう……」

「だって……うー、大英博物館……」

「あとで行きましょうや、博物館でも美術館でも。さっさと仕事終わらせてからな」

槇は既に仕事モードに入っているらしい。この状態の槇はとても風格が出る。

同じく仕事モードのときのスイッチの切り替わり方が半端じゃない咲はというと――

「いやー。霊歌さんのこんなところが見られるとはねえ……」

しみじみしていた。

たまに思う。

この人、仕事のスイッチが入ってないときは、天然……というよりもむしろ、おばあちゃんっぽい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6931y/>

ウィザードライセンス

2012年1月12日20時46分発行